

事項一四 巴里講和會議ニ於ケル戦争責任委員会及 前独国皇帝取扱關係一件

八一〇 一月八日

内田外務大臣ヨリ
在蘭国落合公使宛（電報）

独軍リンブルグ通過事件及前独帝処分問題ニ

関シ執ルベキ措置ニ付訓令ノ件

第一号

（一月十二日接受）

貴電第二〇八号ニ関シ

独軍「リンブルグ」通過事件及前独帝処分問題共ニ帝国ノ利害關係上貴官ヨリ進ンテ与国代表者ノ行動ニ参加シ又ハ別ニ積極的措置ヲ執ラルヘキ必要ナシト思考ス尤モ与国同僚トハ絶ヘス緊密ナル接触ヲ保チテ本体ノ進行ニ注意シ特ニ必要アラハ与国代表者ト一致ノ歩調ヲ以テ行動セラレ差支ナシ

八一 一月十一日

在蘭国松原臨時代理公使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

前独帝処分問題及独軍リンブルグ通過事件ニ

関シ英国代理公使及米国公使館員ノ談話報告

ノ件

第一〇号

貴電第一号ニ関シ

過日一蘭国新聞紙ガ前独帝ノ処分ニ関シ英蘭兩國政府間ニ一致ヲ見タリトノ報道ヲ掲ゲタルニ対シ今回当地英国公使館ハ右新聞報ヲ打消スノ「コンミュニケー」ヲ發シタルガ尚英国代理公使ハ本官ニ対シ前独帝ノ処分ハ平和會議ニテ決セラル可キ問題タル可シト語り又本官ヨリ過日新聞紙上ニ蘭国政府筋ニテハ独帝ニ対シ国外ニ退去ヲ希望シタルモ独帝之ヲ拒ミタリトノ報道アリシニ言及シタル処同代理公使ハ右報道ヲ信ゼズト答ヘタリ独軍リンブルグ通過事件ニ

付米国公使館員ノ言ニ依レバ同公使ハ他ノ公使程強キ抗議ヲ為サズ単ニ該事件ハ後日先例ト見做サル可キニ非ザル旨ヲ蘭国政府ニ申送リタル迄ナリト言ヒタリ

八一 一月十六日

在蘭国松原臨時代理公使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

前独逸皇帝ノ引渡ヲ列国力公式ニ要求セル場

合ノ措置ニ付蘭国司法大臣談話ノ件

附記 大正七年十月二十六日在壤洪国本多公使發内田外

務大臣宛電報第一一五号

カール皇帝幽閉ニ関スル件

第一五号

往電第一〇号ニ関シ

独逸前皇帝ノ処分問題ニ付テハ過般來蘭国政府ニ於テ特ニ大学教授裁判官等ヨリ成ル委員会ヲ設ケテ法律上ノ見地ヨリ考究中ノ趣ニテ其結果ハ今猶秘密ニ附シ議員ノ請求アルモ政府ハ之ガ公表ヲ拒ミタル由ナルガ今回当国司法大臣ハ列国ガ公式ニ前独帝ノ引渡（エキストラディクション）ヲ請求スレバ先ヅ法律上ノ手續トシテ事件ヲ当該地方即チ「ウ

トレヒト」ノ裁判所ニ移シ其決定ヲ待チ司法大臣ヨリ更ニ前記委員会ニ諮問シタル上最後ノ決定ヲ為スベキ旨新聞通信員ニ語レル由尚前独帝及皇后ハ右引渡ノ風説其他ノ為メ頗ル不安ヲ感ジ昨今ノ健康甚ダ不良ナリト云フ

（附記）

大正七年十月二十六日在壤洪国本多公使發内田外務大臣宛電報

第一一五号

カール皇帝幽閉ニ関スル件

第一一五号

往電第一一四号ニ関シ

洪牙利政府及在「ブダペスト」聯合國代表者ハ協議ノ上「カール」皇帝ヲ一時 Platten 湖畔（「ブダペスト」ノ西南著名ノ避暑地）Tihany 寺院ニ幽閉スル事ニ決定セリ尚洪牙利政府ハ曩ニ皇帝派ノ休戰申込ニ対シ（一）無条件ノ降服（二）皇帝ノ軍事助言者ヲ戰時裁判ニ付スルコト（三）兵卒ハ武装解除ノ上特赦スルコト（四）皇帝ノ最終的退位（五）護送問題ノ決定スル迄皇帝ヲ洪牙利ニ抑留シ置クコト（六）最終ノ滞在所及旅行ノ方法ハ聯合國ニ於テ決定スルコト（七）皇帝ノ政治的助言者ヲ裁判ニ付スル事ノ七条件ヲ提出シタルカ今回皇帝ハ

無条件ニテ降服セルヲ以テ上述政府側ノ条件ハ同意サレタルモノト見做シ居レリ

尚 Andrassy 伯ハ(脱) Dr. Gratz 及 ヲ Rakovsky ハ逮捕「ブダペスト」ニ護送中其他 Stephan Friedrich (前首相) Szilagy (下院議員) 等モ逮捕セラレタル由ナリ

八一三 二月四日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

開戦責任及制裁委員会第一回會議ニ於テ該委員會ノ構成及分科會設置等ヲ決定ノ件

講第七七号

(二月六日接受)

Commission des Responsabilités des Auteurs de la Guerre et Sanction (今後ハ責任委員会ト約用ス) 第一回會議六月三日内務省ニ於テ開會、五大国委員各二名及英國第一委員差支ノ場合ニ代理出席スベキ同国委員一名ノ外白耳義塞爾比羅馬尼希臘波蘭ヨリ各一名委員参列、大出席委員ハ米「ランシング」英「アットニー、ジェネラル、サー、ゴケンドンヘワート」仏「タルディユ」伊国上院議員 Scialoja 本邦ヨリハ安達公使長岡参事官但シ安達公使ハ

日午前)

八一四 三月六日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

戦責委員会第二及第三分科會ニ於ケル討議状況報告ノ件

講第二九三号

(三月八日接受)

戦責委員会ノ設定ノ目的ハ前電講第二六六号所陳ノ通り前独帝以下最高責任者処罰ニ関シテ研究スルニアル処第二分科會(戦争開始並ニ白耳義「ルクサンブルグ」中立侵害ニ関スル分科會)ニ於テハ当初具體的ノ処罰ヲ課セントスル英仏兩國委員ノ主張アリタレトモ米國委員ノ不同意アリタル為メ二月廿七日ノ會議ニ英國委員ヨリ(一)戦争開始ニ関スル責任ノ審理ハ戦前永キ年月ニ亘リ歐洲諸国ニ起レル諸事件ヲ取調フル等多大ノ時日ヲ費スヲ要シ処罰ノ時期ヲ失スルノミナラス右責任ハ寧ロ政治道德上ノ問題ニ関シ法律問題トシテ責任者処罰ノ理由トセサルヲ適當トスヘク(二)白耳義及「ルクサンブルグ」中立侵害ハ条約ノ侵犯ニシテ寧ロ國家全体行為ト目スヘキ故ニ本問題ニ付テモ独帝其他要

未着欠席「タルディユ」仮議長トシテ開會ノ辞ヲ述ベ「ランシング」ヲ議長ニ推薦シ異議無ク可決「ランシング」議長席ニ就キ副議長ニ英伊首席委員ヲ推薦シタル後書記局長ニ「ラブラデル」巴里法科大学教授ヲ推シ書記局委員ハ参列各国ヨリ各一名ヲ指定セン事ヲ求ム、次デ議事ノ進捗ヲ計ル為分科會ヲ設クルノ議起リ意見交換ノ末開戦前後ノ責任ニ関スル法的研究、戦争中国際法違反行為ニ関スル法的研究及右事項ノ調査ヲ各別ニ管掌スル為三分科會議ヲ置クニ決ス但シ分科會ノ決定ハ悉ク委員會總會會議ノ決議ヲ經ルニ非ザレバ確定セザルモノトス又委員差支ノ為出席セザル場合ニハ他ノ委員ヲ臨時参列セシムルヲ妨ゲズ而シテ當委員會ノ討議事項ハ他聞ヲ憚ルモノ少カラザル可キニ付議事ノ「コムニケ」ハ極メテ簡單トナスニ決ス議長ハ英國委員 Massey 仏「タルディユ」希臘 Politis ヲ指名シ各委員ノ分科會配属ヲ協議セシムルコトトス以上ハ第一回會議ノ決定事項ナレトモ右ノ外英國第一委員ハ今後休戦延期ノ際独逸犯行ノ資料タル可キ書類ノ交付ト犯行者ノ引渡ヲ要求スルコト然ル可ク英國ハ右犯行者ノ名簿ヲ有スル旨ヲ述べ仏國委員亦仏國ニモ該当名簿存在スルコトヲ注意シタリ(四

路者ノ個人的刑事責任ヲ問ハサルヲ至当トストノ新案ヲ提出シタルニ大体採決セラレ字句修正ノ為メ立案委員會ノ議ニ附スルコトトナリタルヲ以テ独帝其他最高責任者処罰ノ目的ヲ達センカ為メニハ第三分科會ノ目的タル國際法ノ慣例違反トシテノ責任ヲ問フノ外ナキニ至レリ

然ルニ第三分科會ニ於テハ國際裁判所ノ設立ニ付米國委員ノ断乎タル反対アリテ意見纏ラサル為メ(不明)英米仏及羅馬尼委員ヨリ成ル立案委員會ヲ組織シ之カ審議ヲナシシムル事トナシタル処三月四日本委員會ノ報告ヲ討議スル為メ第三分科會ヲ開催ス

委員會報告ノ要旨ハ違反行為ニ関スル裁判權ニ付国内裁判權(例ヘハ犯人カ聯合國ニ俘虜タル場合ノ如キ)ト聯合國代表裁判官ヨリナル國際裁判(五大国ヨリ各三名ノ裁判官白希臘塞四国ヨリ各一名ヲ任命ス)トヲ認メ後者ハ(イ)犯罪カ聯合國中數カ国ノ軍人非軍人ニ対シテナサレタル場合(例ヘハ独逸俘虜ノ収容地ニ於ケル独逸官憲ノ措置)(ロ)數國ノ戰(脱)ニ付指揮權ヲ行使セル高級官憲ニ対シ(ハ)數國ニ亘リ人道違反ノ行為ヲ命シ又ハ之カ禁遏若ハ緩和ヲ命セサリシ点ヨリシテ前独帝ニ対シ(ニ)其他交戰國ノ法律ニ違

反セルモ之ヲ他ノ裁判所ヲシテ審理セシムルヲ適當ト認メタル一切ノ犯人ニ對シ管轄權ヲ認メントスルニアル処右四点ニ關シ米國委員ハ特ニ讓歩ヲナシ國際法違反行為ハ凡テ各國軍裁判所ヲシテ其軍事法規ニ依リ審理処罰セシムヘク右軍裁判所ハ犯罪カ裁判所所屬國領土内ニ於テナサレタルカ若クハ被害者又ハ被害物件カ裁判所ト同一國籍タル場合ニ管轄權ヲ有スヘク而シテ一罪カ數國ノ軍裁判所ニ屬スル場合ニハ國際裁判所ハ一ノ國際裁判所ヲ構成シテ合同審理スヘキ旨ヲ宣言シ居レリ

第三分科會ノ席上「ランシング」氏ハ國際裁判所ハ米國參戰前犯サレタル國際法違反行為ヲモ審理スヘキコトナルヲ以テ米國トシテハ之ニ賛成スルコトヲ得ス尤モ米國ハ數國ニ亘ル犯罪ニ就テハ關係國際裁判所ハ國際委員會ノ組織ヲ提議スヘシト述ヘタル処英仏委員ハ國際裁判所設定ノ趣旨ハ唯ニ自國ニ對スル復讐ノ意味ニ非ス希臘、塞耳比、波蘭等ノ外全世界ニ於テ行ハレタル人道違反ノ行為ヲ懲罰シ正義ヲ其正當ノ（不明）ニ回復スルニアルヲ以テ國內裁判所ハ此目的ヲ達スルニ充分ノ權威ヲ有セサルヘカラス殊ニ仏國刑法ノ如キ犯罪カ仏國領土内ニ行ハルルヲ要スル上國

トノ意味合ニテ其ノ設定ヲ認メテハ如何ト提議シ結局各委員ノ提議ヲ參酌スヘシトノ條件ノ下ニ米國委員ハ遂ニ本件ヲ更ニ立案委員會ノ議ニ附スルニ同意シ散會セリ右會議ノ席上米國カ特ニ最近國際裁判所設立ニ反對スルニ到レル理由ニ付仏國委員「ラルノード」カ安達ニ内話セル所ニ依レハ「ウィルソン」大統領ハ特ニ歸國以來三回引続キ大統領選舉ニ當選セントスル希望ヲ抱クニ到リタル処右當選ニ付在米獨逸人等ノ援助ヲ得ルカ為メ前獨逸皇太子等ノ國際裁判所ニ引致セラルルニ到ラサル様轉旋シ以テ其心ヲ収メントスルニ基クモノナル由ナリ

八一五 三月八日 在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

戰責委員會第二分科會ニ於テ立案委員會報告

ヲ審議ノ件

講第三二一號

三月六日戰責委員會第二分科會開催立案委員會ノ報告ヲ審議ス報告ノ趣旨ハ前電講第二九三號ノ通り第二分科會ニ關スル限り法律上訴追ヲ認メザルニ在ルモノナルガ英國委員

一四 巴里講和會議ニ於ケル戦争責任委員会及前独国皇帝取扱關係一件 八一五 八一六

國際法違反行為（例ヘハ「テロリズム」）ハ必スシモ之ニ規定セラレ居ラサルヲ以テ終ニ懲罰ノ手段ナキニ至ルヘキナリ米國中立當時ニアリテモ「ルシタニヤ」号事件ノ如キ人道違反ノ行為トシテ米國ノ輿論ヲ激昂セシメタルニ非スヤ然ルニ國際裁判所カ同國參戰前ノ犯罪ヲ審理スヘキコトナルヲ以テ賛成シ得ストハ諒解ニ苦シム所ナリ米國カ今日迄聯合國ト共ニ血ヲ流シ來リタルニ最後ノ時期ニ到リ吾人ヲ見捨ツルカ如キコト（脱）ヲ希望ストテ兩委員トモ國際裁判所特設說ヲ最後迄主張スヘシト極言シタルニ對シ「ランシング」ハ「ルシタニヤ」号事件ハ米國ニ對スル犯罪トシテ米國裁判所ノ管轄ニ屬スヘキヲ以テ本件ニ就テハ議論ヲ為スヲ好マサルカ必要ノ場合ニハ何等カ適當ノ措置ヲ為スヘシト述ヘ英國委員ヨリ右報告ヲ再度立案委員會ノ議ニ附セント提議スルヤ「ランシング」氏ハ英仏ニシテ飽ク迄其意見ヲ主張スルニ於テハ米國ハ其委員ヲ立案委員會ヨリ脱退セシムルノ外無シト述ヘ決定ヲ見ルニ到ラサリシカ仏希臘兩國委員ヨリ國際裁判權ヲ認ムルトスルモ米國ハ參戰以前ノ犯罪ニ就テハ裁判ノ際留保ヲ為スヲ得ヘシト云ヒ又伊國委員ヨリ各聯合國ハ國際裁判所ニ列スルノ權能ヲ有ス

ヨリ右報告ノ末尾ニ講和會議ニ於テ開戰及中立侵害ノ首謀者ニ對シ適切ナル弾劾の宣言ヲ為スタメ特別機關ノ設置ヲ適當ナリト認ムル事ヲ得ヘキ旨ノ文句挿入ヲ提議シ採決ノ上解散ス

仏國委員ヨリ右犯人ヲ訴追セザルトスルモ之ニ對シ例ヘバ「ホーヘンツォールレルン」家ノ失權等ノ手段ニ依リ体刑以外ノ制裁ヲ科スル為メ講和會議參加諸國ハ代表者ヨリ成ル特別機關ノ設置ヲ講和會議ニ要求スベシト提議セルモ右ハ寧ロ戰責委員會總會ヨリ講和會議ニ提出スベキ報告中ニ記載セラルベキモノニ屬シ分科會ヨリ委員會ニ為スベキ報告ニ入ルベキモノニ非ズトシテ否決ス

八一六 三月十日 在仏國松井大使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

戰責委員會第三分科會ニ提出セラレタル立案

委員會修正報告ノ内容ニ關スル件

講第三三二號

三月八日戰責委員會第三分科會開催立案委員會修正報告ヲ決議シ之ヲ戰責委員會本會議ニ提出スルニ決ス右報告ハ全

部五章ヨリ成リ其大義次ノ如シ

第一章 第三分科会ノ権限

第三分科会ハ戦争中行ハレ第一分科会ノ調査事實ニシテ
訴追ノ目的トナル場合ニハ責任者ニ就キ如何ナル裁判ノ
目的トナルヤニ関シ意見ヲ開陳スルノ権限ヲ有スル処右
権限ニ基キ左記報告ヲナス

第二章 戦争ノ法規慣例ノ基礎タル原則

右原則ハ啻ニ正文国際条約ノ外文明国ノ間ニ確定セル慣
習人道ノ法及公共良心ノ要求ヨリ生ズル等凡テ国際法ノ
一般原則ヲ指スモノトス(千八百九十九年「ヘーグ」条
約参照)

第三章 戦争ノ法規慣例ノ違反行為

報告ハ一般人民ニ対シテ行ハレタルモノ及戦闘員ニ対シ
テ行ハレタルモノ及兩者ニ関スルモノノ三種ニ分チ二十
六種ヲ例証ス其ノ内「テロリズム」^{恐怖政策}、「デポルテーショ
ン」^{追放}、疫病ノ伝染等従来国際法規ニ規定セラレザルモノ
ヲ包含シ居レリ

第四章 戦争ノ法規慣例違反ヲ裁判スベキ裁判所

報告ハ前章所定犯罪ノ責任者ハ各交戦国ニ現ニ存シ又ハ

- (一) 高等裁判所ハ日、英、米、仏、伊各三名、白、希、
波蘭、葡萄牙、羅、塞、「チェック、スロバック」各二
名——其ノ現ニ存シ又ハ将来特設セラルベキ国内裁判所
又ハ軍法會議ノ職員中ヨリ任命組織ス
- (二) 訴追事實ノ全部又ハ一部ガ高等裁判所組織国ノ参戦
前ニ遡ルトキハ当該組織国ノ代表裁判官ハ其裁判所ニ列
席セザルノ権能ヲ有ス
- 右ノ場合ニハ裁判官ハ高等裁判官ガ当該事件ニ於テ其代
理人ヲ任命シ得ルガ為メ適當ノ時機ニ回避ノ通告ヲ為ス
ヲ要ス(本条ハ立案委員会ニ於テ米国側ノ留保ニ依リ新
タニ挿入セラレタルモノ往電講第二九三号参照)
- (三) 高等裁判所ハ「文明国ノ間ニ確定セル慣習人道ノ法
及公共良心ノ要求ヨリ生ズル——等凡テ国際法ノ原則ニ
從ヒ」裁判ス
- (四) 被告有罪確定シタル場合ニハ高等裁判所ハ其組織国
ノ一二於テ同種ノ罪ニ付科セラル可キ刑罰ニ処スルノ権
ヲ有ス
- (四) 訴訟手続ハ高等裁判所之ヲ規定ス
- (六) 高等裁判所ニ告訴スルノ権限ハ五大国代表者五名ヨ

一四 巴里講和會議ニ於ケル戦争責任委員会及前独国皇帝取扱關係一件 八一六

特設セラルベキ当該裁判所ニ於テ審理セラレムコトヲ提

議シ犯人ガ裁判国ノ俘虜トナリ其他其圈内ニ入りタル場
合ニハ原則トシテ国内裁判ヲ認メ左記四種ノ責任者ノ審
理ニ就テハ高等裁判所(国際裁判所ノ名称ヲ避ケ特ニ
haut tribunal ト称スルコトニ決ス)ノ特設ヲ必要ナ
リト認ムル旨ヲ規定ス

(イ) 俘虜收容障地其他「コウルン」等ニ於ケル独逸官憲ノ
行為ノ如キ一時ニ多数ノ聯合國軍人非軍人ニ対シテ罪ヲ
犯セル敵国人

(ロ) 聯合國中数国ニ対スル戦争行為ニ関シ命令ヲ發セル敵
国官憲

(ハ) 野蛮若ハ暴虐ノ行為ヲ命ジ又ハ之ガ制止ヲ為スニ適當
ノ手段ヲ取ラザリシ一切ノ敵国文武官憲但其地位階級ノ
如何ニ高キヲ論ゼズ国ノ元首ヲモ含ムモノトス(本条ハ
往電講第二九三号第三分科会立案委員会ノ報告要旨「ハ」
ヲ改正シタルモノナリ)

(ニ) 違反行為又ハ交戦国ノ法律ノ性質ニ鑑ミ高等裁判所以
前ノ裁判所ニ引致セザルヲ適當トスル一切ノ敵国人
高等裁判所ノ組織次ノ如シ

- リ成ル追訴委員会「Commission des Poursuites」ニ
属ス右委員会補佐ノ為其他ノ政府ヨリモ代表者ヲ出スコ
トヲ得可ク又追訴委員ハ事件ガ本国ノ参戦前ニ遡ル場合
ニハ回避シ得ルコト第二ノ場合ニ同ジ
- (イ) 高等裁判所ニ追訴スルガ為聯合与国ノ権内ニ在ル犯
人引渡シノ要求ハ追訴委員会ニ為ス可シ
- (ロ) 高等裁判所又ハ追訴委員会ニ継続中ノ犯罪ニ就テハ
国内裁判所ハ裁判スルコトヲ得ズ但敵国裁判所ノ訴訟又
ハ判決ハ何等ノ影響ヲ及ボサズ
- 第五章ノ次ギ
- 上述ノ理由ニ基キ分科会ハ左ノ提議ヲナス
- 第一、前章規定ノ高等裁判所ヲ特設スルコト
- 第二、講和条約中ニ左ノ事項ヲ規定スルコト
- (a) 敵国政府ハ講和後ニ於テモ聯合國国内裁判所及高等
裁判所ノ裁判權ヲ認ムルコト戦争ノ法規慣例及人道ノ法
ニ違反セリト認メララル敵国人ハ交戦国ノ承認スベキ大
赦ヨリ除外セラル可ク且ツ右犯人所属国政府ハ裁判ノ為
之ガ引渡シヲ約ス可キコト
- (b) 敵国政府ハ左ノ書類ノ交付ヲ約ス可キコト

- (1) 聯合國ニシテ審理ノ資料上必要ト認メタル敵国ノ軍人非軍人ノ収容陣地其他一切捕虜ノ勞役留置ニ關係アル場所ニ於テ命令其他尠クトモ或程度ノ權力ヲ行使セルモノノ氏名ノ通告及ビ右ノ場所ニ於ケル一切ノ命令又ハ其ノ写其他ノ報告書類
- (2) 國際ノ法規慣例又ハ人道ノ法ニ違反セル行為其他軍事行動ニ關係アル一切ノ命令其寫軍事裁判所其他審判所ノ訴訟書類及各種ノ報告其他ノ書類
- (3) 右ノ行為其他軍事行動ヲ遂行シ又ハ之ニ付責任アルモノヲ指摘スルニ足ル可キ一切ノ資料
- (4) 潜水艇ノ行動ニ關係アル一切ノ船舶、書類、海図報告其ノ他ノ書類
- (5) 潜水艇ニ与ヘラレタル一切ノ命令並右潜水艇行動ノ細目及ビ範圍
- (6) 戰爭中敵国艦船、其ノ乗組員ノ犯セリト認ムベキ國際ノ法規慣例又ハ人類ノ法ニ違反セル行動ニ關シ聯合國ノ要求スベキ一切ノ書類
- (c) 聯合國政府ハ高等裁判所ノ運用並其判決ノ実施ヲ確保スルニ必要ナル法制ヲ採用スルコト

八一七 三月十三日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

最高軍事會議ニ於テ獨国皇帝国外退去問題ニ

付審議ノ件

講第三五〇号

三月十二日午後三時高等軍事會議開催「ロイド、ジョーシ」氏ハ在維納英國「ミッシェン」ノ通報ニ依レハ獨国ニ於テ目下前皇帝追放ノ法律制定ノ議アリ皇帝ハ多分瑞西又ハ英國ニ遁ルヘシト云フ処瑞西ハ聯合側ニ於テ引渡ノ要求ヲナササルヘキ事ヲ言明セサル以上入国ヲ許可セサルヘク英國又之レヲ欲セス本獨国皇帝ハ「カイザー」ト異リ現戰爭ニハ直接ノ責任ナク又殘虐ノ処為ヲ命シタル事モ無之ニ付之ヲ罰スルニモ及ハサルヘシ兎ニ角獨国ヲ去ルニ異存ナク瑞西ニ赴クモ引渡ヲ要求セサルヘキ旨表明致度自分トシテハ皇帝ヲ国外ニ遁レシムル事此際適當ノ処置ナルヘシト思考スト述ヘタルニ「ソンニノ」男ハ別段異存ナキモ事實ノ問題トシテ目下責任委員会ニ於テ夫々責任者ノ研究中ナルニ彼ノミヲ先ツ除外スヘキ事ヲ茲ニ決定スルハ稍當ヲ得サルニアラスヤト思考スト反問シ「バルフォア」氏ハ「ソ

(d) 訴追委員会組織國ハ中立國內ニ在ル犯人ノ引渡ヲ受クルガ為協同シテ中立國政府ト商議ヲ遂ゲ可キコト(以上報告終リ)

右報告第三ニ付前段四種ノ責任者ヲ規定セル条項(イ)ニ關シ「ランシング」氏ハ元首ノ文句ハ不必要且不稳當ナルヲ以テ削除センコトヲ提議シタルニ英仏委員ハ立案委員會ノ最初ノ報告(往電講第二九三号)ニ於テハ前獨帝ト明示セルモ米國ノ主張ヲ納レテ本案ノ如ク概括的ニ規定シタルハ吾等ニ取リテ出来得ル丈ノ讓歩ヲナシタルモノニシテ此上ノ讓歩ヲナスコトヲ得ズトノ反對アリ米國委員ハ尚本案ハ制止ヲナスニ適當ノ手段ヲ執ラザリシトテ(脱)モ之ニテハ不充分ニシテ制止シ得ベカリシ行為ニ對シ公然同意ヲ表シタルヲ要ス可シトテ新タニ修正ヲ提議セルモ是亦採用セラレズ右ノ理由ニ依リ米國ハ本案ヲ留保セリ英國委員ハ本案ハ重要問題ナレバ少時考慮ノ期間ヲ与ヘラレ度キ旨ヲ述ベテ留保ス

ンニノ」男ノ言尤モナルモ引渡ノ要求ヲナサストノ証言ナキ以上ハ何國ト雖モ彼ヲ収容スルモノナカルヘキニ付兎ニ角仮リニ何レニカ遁レ差支ナキ旨言明シテハ如何ト述ヘ種々討議ノ結果「バルフォア」氏ニ前記在獨英國「ミッシェン」ニ對スル回答案起草方ヲ一任シ本件終結ス(以下省略)

八一八 三月三十日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

戦争責任委員会總會ニ於テ各分科會報告ヲ審

議ノ件

講第四七三号

戦争責任委員会ハ三個ノ分科會ヲ設ケ二月中旬以降會合ヲ重ネ各分科會ニ於テ報告ヲ作成シタルガ三月十二日總會開會安達立兩委員出席第一分科會ノ報告(往電講第二九〇号)及第二分科會ノ報告(往電講第二九三号)ヲ承認ス第三分科會ノ報告(往電講第三三二号)ニ付米國委員「ランシング」ガ新提議ヲナシ一方ニ於テ報告書第四章ノ(イ)ヲ削リ別ニ一項ヲ設ケテ國家元首ヲ國際法違反ノ故ヲ以テ裁判所

ニ引出スガ如キ前例ナキコトヲ行ハズシテ政治上法律上道徳上ヨリ前独逸皇帝ノ責任ノ範圍ヲ審査スベキ國際審査委員會ヲ設クルヲ定ムベシトシ他方ニ於テ別ニ一ノ宣言書ヲ發シテ前独逸皇帝ノ残忍ナル戦争ヲ起セル罪ヲ鳴ラサントス米國ノ此提議ハ英仏ノ委員ノ痛ク反対スル所トナレリ三月十三日委員會總會開カレ米國ハ更ニ其提議ヲ改メ戦争開始ヲ致セルモノニ關スル刑事的責任ヲ一般ニ審査シ且戦争中ニ行ハレタル交戦法規違反ニ關スル刑事的責任ノ問題ヲモ審査スベキ國際審査委員會ヲ設ケントスル新提案ニ対シ(脱)兩國ノ委員ハ反対ヲ表セリ

希臘委員「ポリチス」ハ米國ノ主張ト英仏其他多数國ノ主張ヲ調和スルコトヲ試ムル為別ノ事項ニ対シテ刑事的責任ヲ負ハシメントスルモノニシテ第三者ヲシテ不当ノ感ヲ懷カシムルニ足り却テ直接ノ犯行ニ与リシモノガ上長者ノ責任ノ後レテ其責任ヲ免ルル虞ヲ生ズ

三月十四日委員會總會開カレ(イ)ノ修正ニ關スル希臘委員「ポリチス」ノ提案中二点ヲ區別シテ採決シ第一点タル「國ノ元首ヲモ含ムモノトス」ノ語ヲ削リ「一切ノ敵國官憲」ト有ルヲ「一切ノ敵國文武ノ人物及ビ官憲」ト改メン

報告書第四章中ニ新タニ一条ヲ設ケ「高等裁判所ノ裁判官及ビ訴追委員會ニ於ケル其代表者ヲ出セル諸國ハ其欲スル所ニ從ヒ自己ノ出セル裁判官又ハ代表者ヲ第四章ニ記セル總テノ裁判及ビ其他ノ手續ニ与ラシムルコトヲ得」ト定メントテ提議ノ趣旨ガ米國ヲシテ(イ)ノ認ムル消極的ノ刑事(脱)場合等ノ法律上責任ヲ存セザルベキ場合ニ付裁判ニ与ルコトナカラシメントスルニ在リト述べ報告書中ニ列記セル國際法違反ノ行為ニシテ現在ノ法律上刑罰ヲ科シ得ザルモノ有ルコトヲ附言シタリ

三月十七日委員會總會開会シ前回ノ米國ノ提案ニ關連シテ米國委員ハ英國委員「ボロック」ノ質問ニ答ヘテ仮令他提案ガ通過スルモ(イ)ノ消極的責任ヲ認ムル点ニ不満足ナルヲ以テ依然(イ)ニ關シテ留保ヲ維持スルコトヲ言明シ英仏委員ノ反対意見ヲ聴キタル後「ランシング」ハ該提案ヲ撤回シ而シテ報告書第四章及ビ第五章全体ニ關スル留保ヲ言明セリ英國委員ハ米國ガ留保ヲ行フ以上ハ米國ノ意見ヲ考慮シテ行ヘル諸種ノ修正ヲ報告書中ヨリ除クコトヲ提議シ第四章(イ)ニ關シ再ビ「國ノ元首ヲモ含ム」ノ文句ヲ挿入シ

トスル点ニ關シテ採決セルニ米國委員ガ可否ノ數ニ加ハラザル以外ハ全会一致ヲ以テ可決セリ次ニ第二ノ点タル單ニ部下ノ交戦法規違反ノ所為ヲ制止スルノ処置ヲ執ラザリシコトニ対シテ刑事的責任ヲ負ハシムルヲ廢セントスル点ニ關シテ採決セルニ賛成セルモノハ我國白耳義及ビ希臘ニ過ギズシテ米國ハ可否ノ數ニ入ラズ茲ニ於テ第二点ノ修正ハ少數ノ為メ消滅セリ次ニ第一点ノ修正ヲ經タル部分ト第二点ノ修正ノ成立セザリシ部分トヲ含メル(イ)全体ニ付採決シ米國委員ハ反対シ我國委員ハ(イ)全体ニ關シテ留保スル旨ヲ言明セリ然ルニ仏國委員ハ(イ)ニ關シテ前回ニ白耳義委員ノ述べタル如キ杞憂ヲ絶ツタメニ(イ)中ニ於テ文武ノ頭要ノ人物官憲ガ交戦法規違反ノ行為ヲ制止セザリシ場合直接ニ交戦法規違反ノ行為ニ与レルモノニ対シテ有恕ノ理由ヲ与ヘザルコトヲ明カニスル文句ヲ加フルコトヲ提議シ我委員ハ(イ)全体ヲ留保セルヲ以テ採決ノ際可否ノ數ニ加ハラザリシモ米國委員ノ反対ノ外ハ全会一致ヲ以テ仏國委員ノ提案ヲ可決セリ米國委員「スコット」ハ第三分科會報告書第四章及ビ第五章ニ付留保ヲ言明シタリ

三月十五日委員會總會開会シ「ランシング」ハ第二分科會

「人物」ノ語ヲ削リ且第三分科會報告第四章ニノ訴追事實ノ全部又ハ一部ガ高等裁判所組織國ノ參戰前ニ遡ルトキハ當該組織國ノ代表裁判官ガ其裁判ニ出席セザルコトヲ定ムル規定及同章六末文ノ訴追委員會ノ代表者ガ本國ノ參戰前ニ遡ル事件ニ關スル場合ニ回避ヲ行ヒ得ルノ規定ヲ削ル事ヲ主張シ我國及米國ノ可否ノ數ニ入ラザリシ外ハ全会一致セリ我國委員ハ會議ノ經過ニ顧ミ報告書第四章及第五章全体ヲ留保スルコトヲ言明セリ

三月二十四日委員會總會開会各分科會ノ報告書ニ基キ立案委員ノ作成セル委員(脱)議シ翌日モ開会シテ審議ヲ繼續シタルカ二十五日ノ委員會ニ於テ英國委員ヨリ第三分科會報告書第四章(イ)ニ相當スル部分ニ付修正案ヲ出シ(イ)ハ次ノ如キ形ノモノトナレリ

委員會報告書案第四章(b)(イ)交戦法規慣例違反ノ行為ヲ命令シ又ハ事實ヲ知り干渉スルノ權力ヲ有スルニ拘ハラズ上述ノ如キ行為ヲ防止制止又ハ禁遏スルノ処置ヲ取ラザリシ一切ノ敵國文武官憲ハ其他階級ノ區別ナク如何ニ高級ナリトモ國家ノ元首ヲモ含メテ(高等裁判所ヲ設ケテ此種ノ犯罪ニ付裁判スルヲ可トス)但シ文武官憲ガ防止制止又ハ禁

過ノ処置ヲ取ラザリシ事ハ直接ノ行為者ヲ有恕スルノ理由トナルコトナシトス

(イ)ニ関シ修正ヲ經タルモ尚単ニ避止ノ事実ニ基ク刑事的責任ヲ全然廢スルニ至ラザルノミナラズ「国家ノ現職服務」ノ文字ヲ依然存スルヲ以テ我國ハ尚留保ヲ持續セリ

三月二十五日二十六日及二十九日委員会總會ヲ開キ報告書ノ審査ヲ終ヘタルガ我國委員ハ米國委員ト同シク留保ニ関シテ一ノ覚書ヲ提出シテ留保ニ関スル論点ヲ説明スルコトトナレリ我國委員ノ提出シタル覚書ハ左ノ如シ

戦争責任委員会ニ於ケル日本委員ハ今回ノ戦争中敵國ノ國際法ノ基礎原則ニ背反セル事実多キヲ憤リ之ニ関スル責任ノ主ニ敵側ノ頭要ノ地位ニアル人々ニ存スルヲ認メ國際法ノ權威ヲ将来ニ向テ維持スル為メ責任者ニ對スル實際的ナル膺懲方法ヲ講究スルコトヲ必要ト認メタリ然レドモ交戦法規違反ヲ行ヘルモノヲ戦争後ニ於テ裁判シ処刑スルコトニ関シテ現美國國際法ノ原則カ確定セルヤ否ヤノ問題ヲ生ズルヲ免レズ犯行ヲ行ヘル者ニ對シテ適用スベキ刑法ノ何タルヤノ問題モ亦起リ得ベキ所ナリ其問題ノ場合ニ於テ講和条約ニ依リ敵ヲシテ認メシムル時ハ此新規ナル方法ニ関ス

含ムモノトス)ノ語ヲ削リ單ニ避止ノ事実ニ對シテ刑事的責任ヲ負ハシメントスル規定ヲ削リ趣意ノ希臘委員ノ提案ニ賛成シ而シテ事実ヲ知り且ツ干涉スルノ權力ヲ有シナガラ必要ナル制止ノ処置ヲ執ラザリシ場合ニ於テ始メテ避止ノ事実ニ基キ刑事的責任ヲ負ハシメントスル最後ノ強制ニ對シテ(脱)スルコトニ今尚躊躇スルモノナリ

日本委員ハ上述ノ点ニ付留保ヲナセルモ一考ヲ得ベキ性質ノ提議アラバ喜ンデ之ヲ考量スベキ事勿論ナリトス

八一九 四月十一日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

前独逸皇帝ノ戦責問題ニ関シ米國大統領來談
並戦争責任者所罰ニ関シ四國覚書ニ我方同意
ノ件

別電 四月十日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報

講第五四一号

戦争責任者所罰ニ関スル覚書

講第五三五号

(四月十四日接受)

四月十日米國大統領牧野男爵ヲ來訪シ戦争責任問題ニ関シ懇談シタキ旨ヲ告ゲ本件ニ関スル日本委員ノ留保ニ関スル

一四 巴里講和會議ニ於ケル戦争責任委員会及前独国皇帝取扱關係一件 八一八

一〇七五

ル法律上ノ根拠十分ニ備ハルモノト云ヒ得ルニアラザルベキモ尚敵國ノ元首ヲ交戦國ノ一方ヨリ出ス裁判官ヨリ構成スル裁判所ニ於テ裁判シ処刑スルコトハ得策ナリヤ否ヤノ機微ニ触ルル問題ヲ存シ得ベキナリ此方法ニ依リ膺懲ヲ行フ事ニ伴フテ種々ノ法律上及實際上ノ不便ヲ生ジ得ベキ事ヲ思ヘバ益々此最後ニ述ベタル問題ノ起リ得ベキコトヲ認メザルヲ得ザルベキナリ

殊ニ頭要ノ地位ニアル人々ヲシテ其部下ノ交戦法規違反ノ行為ヲ防止制止又ハ禁遏スルノ処置ヲ執ルコトヲ無視スルノ故ヲ以テ上述ノ如キ裁判所ノ裁判ヲ受ケシムルノ國際法歴史ノ先例ヲ開カントスルニ至リテハ躊躇ノ情ヲ加ヘザルヲ得ズ

上述ノ如キ裁判所ノ判決ノ公正ナル事ヲ世人一般ニ示ス為メニハ刑事的責任ノ原則ニ関シテ寧ロ嚴正ナル解釈ヲ執ルヲ可ナリト思惟セリ現在ノ戦争ニ関シテハ敵側ノ頭要ノ地位ニアル人々カ交戦法規違反ノ行為ヲ命令シテ行ハシメタル事実ヲ証明スルコト困難ナラザルガ如ク考ヘラルルヲ以テ益々上述ノ点ニ於ケル嚴正ナル解釈ヲ可ナリト思惟セリ是等ノ事情ニ基キ日本委員ハ曩ニ第四章(ハ)ノ(國際元首ヲ

覚書ヲ閱讀シ能ク其趣旨ノ有ル所ヲ了解シ篤ト考量ヲ重ネ三国ノ首相トモ熟議ヲ遂ゲタルガ独逸國前皇帝ノ如ク其當局者ニ於テ莊嚴ナル國際條約ヲ破リ白耳義ノ中立ヲ侵スニ當リ十分之ヲ制止スルノ權力ヲ具有シタルニ拘ラズ少シモ之ニ干涉スルコトナク其犯行ヲ承認シタルモノハ到底之ヲ不問ニ附スルコト能ハザルニ依リ別紙覚書ノ如ク五大國ノ裁判官ヨリ成ル特別裁判所ニ於テ之ヲ審判スルノ必要ヲ認メ同大統領及ビ前記三相ノ署名ヲ了シタル右ノ覚書ニ依リ本件ヲ措置スルニ於テハ日本ノ懸念スル形式上ノ困難ヲ除クヲ得ベキモノト考ヘラル同大統領ハ前記三相ノ依頼ニ基キ日本全權ノ同意ヲ求ムル旨ヲ述ベラレタルニ付牧野男爵ハ日本委員ノ覚書ハ重ニ委員ノ専門的考究ノ結果ヲ陳述シタルモノナルガ日本國ニ於テハ十數世紀ノ久シキニ亘リ(脱)涉外行為ニ関スルコトスルモ原案若ハ修正案ノ儘ニテハ國家ノ元首ニ責任ヲ歸スルコトヲ甚ダ不穩ナリトスル次第ナルコトヲ告ゲタルニ米大統領ハ日本國ハ勿論英仏等ノ如ク立憲制度ノ君主國ハ實際ニ於テ君主ハ不可侵ニシテ責任ヲ負ハザル儀ナレバ本件ノ如キモ決シテ右等ノ諸國ニ適用ナキモノト思考セララル旨ヲ述ベ且ツ本件成立ノ場

合ニハ白耳義政府ヲ原告トシテ事件ヲ提起セシムベク裁判所ハ多分約六週間ノ後之ヲ開クコトト成ルベク何レ立派ナル裁判官ヨリ組織セラルル特別裁判所ノコトナレバ其審判モ亦適當ナルモノナルベシ但シ和蘭國ニ於テ果シテ独逸國前皇帝ノ引渡ヲ承諾スルヤ否ヤニ付テハ自分一個トシテハ疑ナキ能ハズト述ベラレタルニ付牧野男爵ハ日本ハ距離遠隔ナレバ或ハ裁判官派遣ノコトハ間ニ合ヒ兼ヌルヤモ計リ難キ旨ヲ述ベタルニ此等ノ問題ハ篤ト實際ニ付可然措置スベキモノト思考スル旨ヲ述ベラレタリ牧野男ハ西園寺侯モ既ニ着巴シ居ラルルニ付一応相談ノ上回答スベシト答ヘ大統領ニ分レ同侯トモ協議ノ上別案ニ同意ヲ表スルコトトシ同侯ノ署名ヲ得タル上別電第五四一号覺書ヲ米大統領ニ返戻セリ

(別電)

四月十日在仏国松井大使発内田外務大臣宛電報講第五四一号

戦争責任者所罰ニ関スル覺書

講第五四一号

(四月十四日接受)

(Most confidential)

Outlines suggested with regard to responsibility

号

右独逸全權書信及右ニ対スル聯合國側回答書

講第一〇五二号

(五月二十五日接受)

五月十五日独逸全權提案ヲ審査スヘキ賠償及戦争責任両委員會ノ聯合会ヲ開キ別電第一〇五三号甲ノ講和會議議長宛五月十三日附独逸全權書信ニ関シ審議シ委員會議ノ裁決ヲ經テ右別電第一〇五三号乙ノ通り独逸全權ヘ送付セラレタリ

(別電)

五月二十一日在仏国松井大使発内田外務大臣宛電報講第一〇五

三号(甲)及(乙)

(甲)

戦争責任問題ニ関スル講和會議議長宛独逸全權書信

独逸全權ニ交付セラレタル講和条約案中第八篇賠償条項ノ冒頭第二百三十一条ニハ「聯合各国政府ハ独逸及其同盟國ノ襲撃ニ依リテ強ヒラレタル現戦争ノ結果トシテ聯合國政府及其國民ノ一切ノ損害及損失ハ独逸及其同盟國カ其責任スヘキヲ宣明シ独逸國之ヲ承認ス」トノ条項アリ独逸ハ戦争責任ノ問題トハ別個ノ問題トシテ千九百十八年十一月

一四 巴里講和會議ニ於ケル戦争責任委員会及前独国皇帝取扱關係一件 八二〇

一〇七七

and punishment.

1. All persons guilty of crimes under the law of war to be tried by military tribunals in usual way and sentenced if convicted to the usual punishments. In case crime was committed against nationals of only one of belligerents, trial to be by the military tribunals of that belligerent. In case crime was against nationals of several of belligerents, trial to be by military tribunal made up out of personnel of military tribunals of belligerents affected. Accused in every case to be entitled to name his own council.

Matsui.

八二〇 五月二十一日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

戦責問題ニ関スル講和會議議長宛独逸全權書

信ニ対シ聯合國側ヨリ回答書ヲ送付ノ件

別電 同日松井大使発内田外務大臣宛電報講第一〇五三

五日ノ國務長官「ランシング」ノ書翰ニ基キ賠償支払ノ義務ヲ引受ケタリト雖世界戦争ノ勃発ニ関シ旧独逸政府ノ負担スヘキ一部責任ヨリ聯合諸國ニ対シ戦争ノ為被リタル損害ヲ独逸國ヲシテ賠償セシムルノ権カ当然生スヘシトナスハ独逸委員ノ認ムル能ハサルトコロタルノミナラス聯合諸國代表者ニ於テモ独逸國民カ其政府ノ行ヘル過失ニ就キ責任スヘカラサル次第ハ数次声明シタルトコロナリ独逸國民ハ戦争ヲ欲シタル事ナク又嘗テ進撃的戦争ヲ企テタル事ナシ彼等ハ今次ノ戦争ハ独逸國民ニトリ一ノ防備的戦争ナリシト確信シ居タリ又独逸全權ハ戦争ノ起因ニ関シ聯合諸國政府ト其見解ヲ異ニシ旧独逸政府ノミ現戦争ノ唯一ノ若ハ主要ナル責任者ナリト思考スルモノニ非ス此点ニ関シ今回交附セラレタル平和条約案ニハ何等聯合側主張ノ基礎並論証トナルヘキ点ヲ含マサルニ付戦争責任ニ関シ聯合諸國ノ公正ナル委員會ノ報告ヲ独逸全權ニ通知セラレム事ヲ希望ス

(乙)

戦争責任問題ニ関スル講和會議議長宛独逸全權書信ニ対スル聯合國側ノ回答書

能ハス云々

八二一 五月二十八日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛（電報）

前独逸皇帝ヲ特別裁判所ノ審判ニ附スル問題

等ニ関シ訓令ノ件

講第四三七号

貴電講第八七三号ニ関シ

前独逸皇帝ヲ特別裁判所ノ審判ニ附セムトスルノ議ニ対シ閣下等カ同意セラルルニ至リタル事情及理由ハ当方ニ於テモ十分諒察スル所ナリト雖本邦世論ノ一部ハ法理上ノ見解並本案実行カ我国体ニ対スル国民ノ信仰上ニ及ホスヘキ影響ニ顧ミ帝國委員ニ於テ飽迄本案ニ異議ヲ唱ヘサリシコトヲ非難シ少クトモ帝國ヨリ裁判官ヲ派遣シテ右審判ニ参加セシムルコトニハ絶対ニ反対セムトスルノ氣勢アリ之ニ処スル政府ノ施措如何ニ依リテハ重大ナル事態ヲ醸スノ虞ナシトセス就テハ

第一 蘭国ニ於テ前独帝引渡ノ要求ニ応スルニ至ルヘキ形勢ナリヤ

五月十三日貴翰ニ於テ貴下ハ独逸カ賠償ヲナスノ義務ヲ認ムルモ戰爭並旧独逸政府ノ行為ニ関スル責任ヲ負ハサル旨ヲ表明セラレタリ斯ノ如キ賠償義務ハ其原因タル損害發生者ノ責任ヲ認ムルニ非サレハ之ヲ了解スルヲ得ス又貴下ハ独逸国民カ嘗テ進撃的戰爭ヲ企テタル事ナシト述ヘラルルモ貴翰中ニ採用セラレタル千九百十八年十一月五日國務長官「ランシング」ノ書翰中ニハ補償ノ義務ハ独逸カ海上陸上並空中ニ於ケル進撃ノ結果トシテ生スル旨ヲ表明セラレアリ而シテ独逸政府ハ之ニ対シ何等ノ抗議ヲナス事ナク之ヲ承認セリ即千九百十八年十一月（脱）案モ（脱）然レ共明瞭ニ其進撃並責任ヲ承認セルモノナルヲ以テ今日之ヲ否定セムトスルモ（脱）ノ期既ニ去レリ又貴下ハ独逸国民ハ旧政府ノ過失ニ対シ其責ニ任セムトスト述ヘラルルモ一國ノ政体又ハ首腦者ノ變更ニ依リ既ニ国民ノ負担セル義務ノ消滅セサルハ國際法ノ原則ニシテ独逸ハ千八百七十一年共和宣明後ノ仏蘭西ニ対シテモ千九百十七年革命後ノ露国ニ対シテモ此原則ヲ実行セリ貴下ハ又賠償委員會ノ報告ヲ求メラレタルモ聯合諸國ハ平和會議ニ於ケル諸委員會ノ報告ハ其内部ノ文書ト認ムルモノナルニ付貴下ノ求ニ応スル事

第二 蘭国カ右要求ニ応シタル場合ニ帝國ハ國家ノ威信ヲ害スルコトナクシテ本件審判参加ヲ辞スルコトヲ得ヘキ余地アリヤ

右二点御觀察至急御電報アリタシ將又今回審判ニ附セラルヘキ前独帝ノ罪ハ固ヨリ從來ノ國際慣例又ハ犯罪人引渡條約ニ依リ認メラレタル所謂引渡犯罪ニ該當セサルモノナルニ付蘭国カ主權國トシテ当然引渡ノ要求ニ応スヘキ義務ヲ有セサルコトハ之ヲ承認セサルヲ得ス從テ若シ蘭国カ右要求ヲ拒絕シタル場合ニ於テ聯合國カ蘭国ニ対シ何等威圧手段ヲ用ヒムトスルカ如キ意嚮アラハ閣下等ハ蘭国ノ主權ヲ尊重スルノ見地ヨリ断然之ニ反対セラレタシ

要スルニ我國ヨリ裁判官ヲ出シ前独逸皇帝ヲ裁判スルコトニ関シテハ前陳ノ如キ議論モアリ又實際ニ於テ我國ヨリ派遣スヘキ裁判官ノ人選ニ就テモ困難ナル事情アリ旁々以テ可成ハ我裁判官ヲ出スコトハ避ケ度次第ニ付其ノ辺御合可然御配慮ノ上何分ノ義電報アリタシ

八二二 五月三十日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛（電報）

戰爭責任問題ニ関シブロックドルフ、ランツ

アウ独逸全權ノ書簡要旨報告ノ件

講第一一四五号

（六月二日接受）

独第六ノ二

五月二十四日附戰爭責任ニ関スル「ブロックドルフ、ランツアウ」ヨリ「クレマンソー」總理宛書簡要旨左ノ通り

独逸ノ戰爭責任問題ニ関スル本月二十日附閣下ノ書簡ニ依リ独逸委員ハ独逸政府及国民カ一九一八年十一月五日附國務長官「ランシング」ノ公文ニ賛同セシ意味ヲ聯合諸國カ

全然誤解シ居ルコトヲ知レリ依テ独逸委員ハ右公文ニ先立ツ諸事實ニ付聯合諸國政府ノ記憶ヲ喚起スルノ要アルヲ認ム合衆國大統領ハ數次ノ宣言ニ依リ現世界戰爭ハ強力平和ニ依ルコトナク正義ノ平和ニ依リ終止セシムヘク米國ハ此正義ノ平和ノ為メ戰爭ニ加入セルコトヲ明カニシ之ニ依テ

「無併合」「無償金」「無賠償」ノ標語ヲ生セシメタリ然

ルニ一方大統領ハ侵害サレタル權利ノ無条件賠償ヲ要求シ一九一八年一月八日ノ教書ニ於テ更ニ所謂十四ヶ条ナルモ

ノヲ表明シタルカ右教書ニ於テ獨逸國民ニ對シ主トシテ
(一)民族自決主義ニ依リ重要ナル東部並西部獨逸領土ノ放棄
(二)白耳義及北部仏蘭西占領地復旧ノ約束ノ二要求ヲ為シタル
カ之等要求ハ獨逸政府及國民ニ於テ能ク之ヲ受諾スルヲ
得タリ蓋シ之民主的獨逸新憲法ノ認メタル所謂自決主義ニ
合シ尚獨逸カ中立侵害ナル此國際法違反行為ニ依リ前記
復旧約束領土ニ戰爭ノ慘害ヲ及ホシタルヲ認メ居レハナ
リ

尚波蘭人民ノ自決權ハ白耳義ニ對スル非法ト同シク獨逸前
政府ノ承認シタル所ナリ

一九一八年十一月五日附國務長官「ランシング」ノ公文
中侵入領土復旧ハ即チ賠償ノ意義ニシテ獨逸ノ見ル所ヲ以テ
スレハ賠償義務ノ存スル範圍ハ単ニ不法行為ニ依リ賠償ノ
責ヲ否定スルヲ得サル領土上並相手國ノ主要政治家カ戰爭
ノ目的トシテ回復ヲ極力主張セル領土以外ニ及ハサルヘキ
ハ自明ノ理ニシテ合衆國大統領ハ一九一八年一月八日ノ教
書ニ於テモ明白ニ白耳義ニ對スル不法行為ノ賠償ヲ以テ國
際法ノ基礎觀念救済ノ方法ナリトシ英國首相「ロイド、ジ
ョージ」氏モ亦一九一七年十月二十二日下院ニ於ケル演說

ヲ認メ東部獨逸ニ對スル補償ノ請求ハ之ヲ差控フルコトト
セリ

聯合側政府ノ意嚮ニシテ若シ總テノ戰時國際法違反行為ニ
對シ賠償義務ヲ認ムルニアラハ獨逸委員ハ其ノ見解ノ主義
上正当ナルヲ認ムルモ同時ニ獨逸モ亦聯合國側ニ對シ巨額
ノ要償ヲ提出スルヲ得ヘク特ニ聯合國諸國カ違法ノ封鎖ヲ單
ニ交戰中ノミナラス獨逸カ進ンテ防衛力ヲ放棄シタル後ニ
至ル迄之ヲ持續シタル為メ獨逸人民ノ受ケタル莫大ノ損害
ニ對シ賠償ヲ要求シ得ヘキモノナルコトヲ指摘スヘシ之ヲ
要スルニ聯合諸國政府主張ハ休戰前為シタル獨逸トノ協定
ニ違反スルモノニシテ為メ多クノ爭議發生ヲ免レス從テ
問題解決ノ便法トシテ條約草案第一編十三條(條約ノ解釈、
國際法規、國際規約ノ破棄ヲ構成スヘキ事實ノ存否若ハ斯
ノ如キ破棄ニ依リ生スル補償ノ範圍及性質ニ關スル論争ノ
如キハ一般ニ仲裁ニ適スル問題ト認ム)トノ條項ニアルカ
如キ公平ナル國際仲裁裁判ノ審判ニ依ルノ外ナカルヘシト
思考ス

猶又本月二十日ノ貴翰ニ於テ國際法ノ原則ニ從ヒ一國民カ
既ニ負擔セシ義務ハ其政体又ハ主權者ノ變更ニ依テ何等ノ

中「白耳義ノ自然ナル政治的領土の經濟的回復及其ノ都市
諸地方ノ破壞ニ對シ出來得ル限り賠償ヲ為サシムルコトハ
英國及其ノ同盟諸國ノ主要ナル要求ニシテ之一八七〇年七
一年獨逸カ仏蘭西ニ對シ為シタル償金ノ如キモノニアラス
又戰費ノ負担ヲ一交戰國ヨリ他國ニ轉嫁セントスルモノニ
モアラス」ト述ヘタリ

白耳義ニ關シ述ヘラレタル所ハ獨逸ニ於テ仏蘭西西部ニ付
テモ亦之ヲ承認スヘシ之獨逸軍ハ白耳義ノ中立侵破ニ依リ
テノミ仏國領土ニ達シ得タルヲ以テナリ

獨逸ハ右事實ニ對シテハ自己ノ責任ヲ認ムルモ所謂開戰ノ
責任又ハ宣戰ノ形式カ先ツ獨逸ヨリ為サレタリトノ外形上
ノ事實ニ對シ強ヒラルル責任ハ之ヲ認ムルコト能ハス「ラ
ンシング」公文ノ眼目ハ賠償ノ義務ハ單ニ物質的ノ損害ノ
ミナラス侵入地域ニ於テ陸海軍並空中ノ戰爭行為ニ伴ヒ生
シタル身体財産上ノ總テノ損害ニ之ヲ及ホスノ点ニアリ
獨逸國民ハ一方白耳義及北仏回復ノ義務ヲ負ヒナカラ他方
露西亞軍他年ノ計畫ニ出テタル侵入ノ結果受ケタル東部獨
逸荒廢ニ對スル要償ヲ拒絕サルルノ甚タ偏頗ナルヲ知ルモ
國際法文上露國ノ侵入ト白耳義侵略トハ之ヲ同視シ得サル

變動ヲ受クヘキモノニ非サルヲ指摘セラレタルモ獨逸全權
ハ該原則ノ正当ナル事ニ就テハ何等抗争セントスルモノニ
非ス又一九一八年十月五日獨逸旧政府ノ申出ニ基キ為シタ
ル協定ノ履行ヲモ拒ムモノニ非サルモ只獨逸全權ノ協議セ
ント欲スルハ條約草案中是迄ノ政治上並ニ軍事上ノ首腦者
ノ行ヒタル所謂罪過ニ對スル懲罰問題ニアリ合衆國大統領
ハ一九一七年十二月四日現戰爭ハ復讐行為ニ依リ終結セシ
ムヘカラス何レノ民族何レノ國民モ無責任ノ主權者ノ不正
行為ニシテ如何ニ重大且恐怖スヘキモノナリトモ之カ為メ
懲罰セラルル事無カルヘシト宣言セリ獨逸委員ハ此種ノ公
約ヲ引照シテ其國際法上ノ義務ヲ免レントスルモノニ非サ
ルモ只開戰並ニ總テノ戰害ニ對スル責任ヲ獨逸國民ニ歸セ
ントスルモノアルニ際シ之等公約ヲ引照スルノ權アル事ヲ
感スルモノナリ又休戰成立直前ノ交渉中聯合諸國ハ若シ獨
逸國民ニシテ其主權者ト其運命ヲ俱ニスル事無キニ於テハ
獨逸ノ運命ハ根本的ニ變化スヘシト公約セリ獨逸委員ハ聯
合諸國當時ノ公約ハ獨逸國民ノ抵抗力ヲ奪フ一ノ詭計ニシ
テ今ヤ聯合國ハ如斯公約ヲ拋棄セン事ヲ欲スルモノナリト
ノ意ニ解スルヲ好マス最後ニ閣下ハ聯合國諸國ハ獨逸カ「フ

ランクフルト」条約及「ブレスト、リトヴスク」条約ノ際執リタルト同一ノ方法ヲ以テ独逸ヲ遇スルノ權アリト主張セラルルモ独逸全權ハ此際如何ナル程度迄是等二条約ト現条約トノ間ニ相違アリヤヲ考查セントスルモノニ非ス蓋シ聯合諸国政府カ其權利主張ノ基礎ヲ之等ノ前例ニ索ムルニハ今日ハ其時期ニ非ス其時期ハ即チ講和談判ノ基礎トシテ米大統領宣言ノ十四点ヲ承認スヘキヤ否ヤヲ決スルノ時ナラサルヘカヲサリシナリ而シテ右十四箇条中ニハ一八七〇年七一年ノ不正ニ対スル訂正ヲ要求スヘキヲ明示スルト共ニ「ブレスト、リトヴスク」条約ヲ以テ攢斥スヘキ一例ト為シ且當時聯合諸国政府ハ過去ニ於ケル暴力講和ヲ以テ今次講和ノ規範トセサルヘキヲ宣言セルニ非スヤ曾テ開戦ノ責任ヲ執リタル事無キ独逸国民ハ其对手国カ如何ナル理由ト証拠トニ依リ現戦争ヨリ生スル惨禍ヲ独逸国民ノ責任ニ帰シ是ヲ平和条件ノ基礎ト為サントスルカヲ反問スルノ權アルヲ信ス随テ聯合諸国政府カ其特別委員会ニ依リ蒐集セル戦争責任ニ関スル諸材料ヲ以テ聯合諸国内部ノ事項トスル趣旨ニ満足スル能ハス本問題ノ如ク独逸国民ノ死活ニ関スル問題ハ之ヲ公論ニ決セサルヘカラス秘密講和ハ

其処ニ非ス独逸政府ハ本問題ニ関シ再ヒ意見ヲ開陳スル所アルヘシ

八二三 六月十四日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

前独逸皇帝ヲ特別裁判所ノ審判ニ付スル問題

ニ関スル訓令ニ付意見具申並請訓ノ件

別電 六月十四日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報

講第一三二五号

戰責委員会ニ於テ日本委員ノ提出セル留保ニ関スル覺書

講第一三二四号(極秘) (六月十七日接受)

独逸ノ前「カイゼル」ヲ特別裁判所ノ審判ニ付スル件ニ関シ帝國委員ハ当初ヨリ我国体ニ対スル国民信仰上ノ万一ノ影響ヲ顧慮シテ慎重ナル考量ヲ加ヘタル所ナルモ退イテ考フルニ独逸国ノ国体ノ特異ノモノナルハ言ヲ俟タザルノミナラズ独逸国内ノ革命ニ依リ皇統既ニ覆リ世人ノ最早ニ之ヲ對シテ君主ノ尊嚴ヲ感ゼザルニ至レル「ギョーム、ド、ホーヘンゾルレルン」ヲ審判ニ付スルコトハ一國ノ現在諸元

首ヲ裁判ニ附セザルベキ現行國際法上ノ原則ヲ破壊スルニ至ラザルモノト言ヒ得ベク特ニ鞏固無比ナル我国体上ヨリ国民ノ信仰ニ動揺ヲ致スカ如キ結果ヲ生ズルコトナカルベキヲ信シ而シテ英仏ノ委員ハ非常ナル熱心ヲ以テ審判ニ付スルコトヲ主張シ我國力強ク之ニ反對スルモ會議ノ大勢ヲ抑止スルノ効ナキハ勿論ニシテ単ニ我國ヨシテ會議ニ於ケル列国トノ協調ノ利益ヲ失ハシムルコトアルベキヲ虞レシメタリ茲ニ於テ慎重協議ノ上独逸前「カイゼル」審判問題ニ関シテ表面ヨリ強ク反對スルノ態度ヲ避ケ而シテ列国ト協調ノ必要上已ムヲ得ズ且適當ノ時機ニ於テ本國政府ヨリ反對ノ訓令ヲ受クルコトナケレバ前「カイゼル」ヲ審判ニ付スルコトニ同意スルノ決意ヲナシ二月十八日附ヲ以テ往電講第一六六号ニ依リ「會議ノ大勢上必要ナル場合ニハ帝國委員ニ於テモ之ニ同意スルノ外ナシト思考スルモ何分ノ御訓令ヲ仰ガ若御訓令到達前可否ヲ決スル必要アル場合ニハ同意ヲ表スベキニ付予メ御合置相成リ度キ」旨ヲ上申シ置キタリ然ルニ戦争責任委員会ニ於テ多数ノ賛同ヲ經タル報告書中ニ於テハ國家ノ元首ガ一定ノ交戦法規違反ノ事實ニ関スル刑事上ノ責任ヲ負フベキノ原則的言説ヲ見タル

ヲ以テ該委員会ニ出席セル我委員ヲシテ委員会ノ報告ニ関シテ留保ヲナサシメ且大体往電講第四七三号末段ニ掲ゲタル趣旨ノ覺書ヲ報告書ニ添附スルヲ求メシメタリ該覺書ハ之ヲ仏文ニ作成セル際多少ノ改竄ヲ加ヘ別電第一三二五号ノ通りトナセリ而シテ該報告書ハ後日ニ於テ之ヲ廣ク世ニ公ニスルノ運トナルベキコト該委員会ノ委員多数ノ考タル所ナルヲ以テ之ニ添附スベキ覺書中ニ於テ述ブル所ノ理由ニ至リテモ立論稍抽象的ニ傾クハ已ムヲ得ザリシ次第ナリ其ノ後四月十日「ウイルソン」大統領我全權來訪談話ノ際同意ヲ求メタル覺書(往電講第五三五号参照)ニ依リ交戦法規違反ノ故ヲ以テ独逸前「カイゼル」ヲ審判ニ付セムトスル趣意ノ委員会多数意見ニ依リ報告ハ之ヲ採用スルコトナク全然新ナル形式ノ問題トシテ國際道德審判等ノ犯罪ノ名義ニ依ラズ政治的基礎ニ依リ審判スルノ問題提出セラレ對独講和条件案中ニ規定セラレタリ該条件案中ニ於ケル前「カイゼル」審判ノコトタル國際法ノ条規ニ依ルニアラズシテ未曾有ノ國際正義審判ノ行ハレタル非常特別ノ場合ニ對スル非常特別ノ政治的処置ニ外ナラズシテ國際法上ノ先例トナルベキ性質ノモノニアラズ之ヲ奈翁ノ幽閉ノコトニ

比スルニ彼ハ裁判ノ手續ヲ行ハザルモ此ハ裁判ノ手續ノ保障ヲ被審判者ニ与ヘスノ如クシテ宣言ニ対シテ重ミヲ与ヘムトスルノ差異アルニ過ギズ彼此共ニ事件ノ根本的性質ハ法律的ノモノニアラズシテ國際高等政策上ノモノニ外ナラズ唯今回ノ「カイゼル」審判ノ場合ニ於テハ被審判者ニ対スル利益ト宣告ニ対スル重ミヲ附スルコトノ為ニ審判ニ法律的ノ形式ヲ与ヘ特別裁判所ヲ設ケ裁判ノ手續ニ依リ裁判ヲ行フト言フニ過ギズ此ノ趣旨ハ対独回答中ニ於テモ明記スルコトナレリ上述ノ独逸前「カイゼル」審判ニ關スル新形式問題ガ提起セラルルニ当リテハ曩ニ戦争責任委員会ニ於テ交戦法規違反ノ故ヲ以テ審判ニ服スルコトニ当初ヨリ強ク反対セル米國モ贊同ヲ表セル所ナルヲ以テ列國トノ協調ノ必要ニ鑑ミテ往電講第一六六号具申ノ趣旨ヲ追ヒ既ニ他ノ四強國ノ同意セル審判案ニ贊同スルニ至リタル次第ナリ

蘭國ニ於テ引渡ノ要求ニ応ズルニ至ルベキ形勢ナルヤ否ヤニ關シテハ容易ニ之ニ応ズルコトナカルベシト思考セラルルモ尚各方面ニ就キ探訪中ナリ何等的確ナル報道ニ接セバ更ニ上申ニ及ブベシ

Koodai 1325

Les Délégués du Japon à la Commission des Responsabilités de la guerre, convaincus que de nombreux crimes ont été commis par l'ennemi au cours de la présente guerre, en violation des principes fondamentaux du droit des gens, et reconnaissant que la responsabilité incombe principalement à des individualités haut placées, estiment que, afin de restaurer pour l'avenir l'autorité des principes ainsi méconnus, il importe de rechercher les moyens pratiques de châtier les personnes responsables des dites violations.

La question pourrait être soulevée à savoir s'il est admis comme principe du droit des gens qu'un Haut Tribunal constitué par des belligérants, peut juger, une fois la guerre terminée, tout individu appartenant au parti adverse, présumé coupable de crime contre les lois et coutumes de la guerre. De même, on pourrait se demander si le droit des gens

次ニ蘭國ガ右要求ニ応ジタル場合ニ帝國ハ國家ノ威信ヲ害スルコトナクシテ本件審判参加ヲ辞スルヲ得ベキ余地アリヤノ問題ニ關シテハ只今トナリテハ最早正面ヨリ参加ヲ辞スルコト不可能ノコトト考ヘラル從テ特別裁判所ノ成ル以上ハ我國ヨリモ裁判官ヲ出ダスノ必要アルベク今ヨリ其ノ準備ヲナスヲ要スルコトト考ヘラル

又蘭國ガ引渡ノ要求ヲ拒絶シタル時ニ於テ聯合國ガ蘭國ニ対シ威圧手段ヲ用ヒントスルガ如キコトアラバ蘭國ノ主權ヲ尊重スルノ見地ヨリ之ニ反対スベキ旨ノ御訓令ハ之ヲ了承セリ但仮令我國ガ反対スルモ威圧ノコト行ハレ特別裁判所組織サルルニ至ルコト万々之無キヲ保スル能ハズ斯ノ如キ場合ニ於テ特別裁判所ニ我國ヨリ裁判官ヲ出ダスヲ断然拒ムハ困難ナルコトアルベシト思惟スルガ如何心得置キ可然ヤ予メ御訓示相成リ度シ

右具申ス

(別電)

六月十四日在仏國松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一三二五号

戦争責任委員会ニ於テ日本委員ノ提出セル留保ニ關スル覚書

prévoit quelle loi pénale serait applicable.

De toute façon il importe, nous semble-t-il, de (脱) conséquences du précédent que créerait, dans l'histoire du droit des gens, la poursuite de Chefs d'Etat ennemis devant un Tribunal constitué par le parti adverse pour infractions aux lois ou coutumes de la guerre.

Nos scrupules augmenteraient lorsqu'il s'agirait de traduire devant le Tribunal constitué comme ci-dessus, des ennemis haut placés pour le seul fait qu'ils se seraient abstenus d'empêcher, d'arrêter ou de réprimer des actes en violation des lois et coutumes de la guerre, ainsi que le stipule l'alinéa (c) du Paragraphe B du Chapitre 4.

On remarquera que, pour faire ressortir aux yeux de l'opinion publique l'équité du jugement du Tribunal approprié, il serait préférable de s'en tenir à l'interprétation stricte des principes de la responsabilité pénale et par conséquent de ne pas faire

de cas d'abstention la base de la dite responsabilité.

Matsui.

Dans ces conditions, les Délégués japonais avaient cru pouvoir adhérer, aux cours des débats de la commission, à un texte qui éliminait de l'alinéa (c) du Paragraphe B du Chapitre 4 les mots : "Chefs d'Etat compris," ainsi que la disposition du même alinéa visant les cas d'abstention, mais ils éprouvent quelque scrupule à se rallier au texte qui admet la responsabilité criminelle au cas où les accusés, en connaissance de cause et ayant le pouvoir d'intervenir, se seraient abstenus d'empêcher ou de prendre des dispositions pour empêcher, arrêter ou réprimer des actes en violation des lois ou coutumes de la guerre.

Les Délégués japonais tiennent à déclarer que, sous le bénéfice des réserves ci-dessus, ils sont disposés à examiner avec le plus grand empressement toute suggestion de nature à rallier l'unanimité de la commission.

(右和訳文) (註 仮訳文ナリ)

戦争責任委員会ノ日本委員ハ今次戦争中敵国ガ国際法ノ根本原則ニ違反セル犯罪ヲ敢テセルコト尠カラズ而シテ之ガ責任ハ主トシテ顕要ノ地位ヲ占メタル人々之ヲ負担スベキモノナリト確信シ斯ノ如ク無視セラレタル国際法原則ノ權威ヲ将来ニ対シ恢復センガ為前記違反行為ノ責任者ヲ懲罰スベキ實際的方法ヲ攻究スルコト必要ナリト認ム

然レドモ茲ニ交戦国ノ構成スル一高等裁判所ガ戦争終了後戦争ノ法規慣例ニ違反行為アリタルモノト推定セラルル敵国所屬ノ一切ノ人々ヲ裁判スル權能アリトスルコトハ国際法ノ原則トシテ之ヲ認ムベキヤ否ヤ一ノ問題タラズンバアラズ又同時ニ國際法上如何ナル刑法ヲ斯ル場合ニ適用スベキヤトノ問題モ亦起リ得ベシ何レニセヨ戦争ノ法規慣例ニ違反スルノ理由ヲ以テ敵国元首ヲ其ノ對手敵国ニ依リ構成セラレタル裁判所ニ於テ訴追スルガ如キハ國際法史上一ノ新先例ヲ拓クモノニシテ其ノ結果タルヤ(脱)スルヲ要スト信ズ殊ニ第四章B款C項ニ於テ規定セラレタルガ如ク顕要ノ地位ニ在ル敵人ヲ上述ノ如キ裁判所ニ公訴スルニ唯戦

八二四 六月二十三日

在蘭国松原臨時代理公使ヨリ
内田外務大臣宛

前独帝ノ取扱ニ対スル蘭国政府ノ態度ニ関シ

報告ノ件

附属書 右報告書

機密第八号

(七月二十九日接受)

大正八年六月二十三日

在蘭

臨時代理公使 松原一雄(印)

外務大臣子爵 内田康哉殿

前独帝ノ取扱ニ対スル蘭国政府ノ態度ニ関スル件

本件ニ関シ在巴里講和全權ノ需メニヨリ別冊報告書調製ノ上今回本官巴里出張ノ際携帯全權ノ手許へ及提出置候条茲ニ別冊供御査閱候 敬具

(附属書)

在蘭国松原臨時代理公使ヨリ在巴里我全權ニ提出セルト同文ノ

報告書

一、独帝入蘭事情

独逸皇帝ハ其隨員ト共ニ客年十一月十日早朝在白国独国大本營所在地 Spa ヲ発シ突然蘭国最南端ノ地点ニ来リ蘭国国境官憲ノ手続終了後 Eysden 停車場ニ入リ Vise ヨリ送り来レル独国帝室用列車中ニ一泊シ十一日朝同列車ニテ Maarn ニ至リ蘭国地方官憲外務省官房長其他ノ迎接ヲ受ケ夫レヨリ滞在地タルヘキ「アメロンゲン」ニ於ケル「ベントンク」伯爵ノ邸宅ニ入りタリ皇后ハ後ニ至リ同地ニ来レリ皇太子ハ居ヲ異ニシテ Zuider zee 中ノ一小島 Wieringen ニ留置セラル（蘭国政府ハ皇太子ヲ軍人ト見做シ留置ノ方法ニ出テタリ）尚独帝ハ十一月二十八日「アメロンゲン」ニ於テ正式ニ退位書ニ署名シ皇太子ハ十二月一日附ニテ王位及帝位ヲ将来ニ辞退スル旨ノ声明書ニ署名シタリ（十一月九日独国官報ニハ同日附帝国宰相タケノ署名ニテ独国皇帝ハ帝位ヲ退クノ決意ヲナシタリトノ告示アリ）

（備考）

「ランデンプルグ」ハ Kolberg 大本營ニ於テ「何故ニ独帝ハ蘭国ニ赴キタルヤ」トノ標題ニテ左ノ声明ヲナセリ

最近輿論ハ独帝蘭国ニ赴キタル事情ニ関シ再ヒ火ノ手ヲ

センカタメニ皇帝ハ右ノ途（外国ヘ赴クコト）ヲ選ハレタリ右ノ信念ニ於テ誤レリトセハ其責ハ陛下ニ存セス

一九一九年三月十七日

大本營ニ於テ

フォン、ヒンデンプルヒ

一、客年（一九一八年）十一月廿日蘭国第二院ニ於ケル内閣議長演説要領

前独帝ハ私人トシテ来リタリ彼ニ与ヘタル待遇ハ自由ヲ尊フ和蘭ノ国民の伝説ニ基クモノニシテ從來亡命者ニ対シ地位ノ上下ヲ論セス与ヘラレタル所ノモノニ外ナラス戦争中数万ノ外国避難民ヲ収容シタルニ拘ハラス先ニ独逸皇帝タリシノ故ヲ以テ特ニ例外ヲ設クルノ謂ナシ但シ政府ハ右ノ待遇カ濫用セラルコトナキ様必要ナル措置ヲ講スヘク前独帝及其周圍ノ人々ハ彼ノ滞在ヲ政治上ノ目的ニ利用スルコトノ其利益ニ非ザルヲ承知スヘシト信ス尚政府ハ列国カ我政府ノ前独帝ニ与フル待遇ヲ尊重セサルヘシト想像スヘキ理由ヲ有セス

一、客年十二月十日第二院ニ於ケル内閣議長ノ演説要

旨

上ケタルニ由リ誤解ヲ避クルタメ予ハ簡單ニ左ノ事實ヲ述ヘントス

十一月九日帝国宰相「プリンツ、マクス、フォン、ハーデン」ハ予メ承諾ヲ受クルコトナクシテ皇帝陛下ノ退位ヲ發表シタルカ当時独軍ハ未ダ敗レスト雖モ其力タル敵軍新手ノ優勢ニヨリ動搖シ休戦条約ノ締結モ目前ニ逼リ居リ其際一方独国ニハ革命起リ暴徒ハ「ライン」橋頭軍隊ノ背後ニ於テ重要ナル兵器蔵所及交通地点ヲ占領シタルタメ兵器彈藥及給与品ノ輸送ハ危険ニ陥リ軍隊内ノ現在高ハ僅カニ数日ヲ支フルニスキサリキ又軍隊ノ信頼スヘキヤ否ヤニ付テモ好マシカラサル報道ノ接受セラルルニ至レリ右状態ニ鑑ミ皇帝カ無事ニ本国ニ帰還セラルルハ最早問題トナラス皇帝カ猶忠誠ナル軍隊ヲ提ケテ帰還ヲ強行セムカ独国ノ土崩瓦解ハ必然ノ結果タリシナルヘク將又皇帝ニシテ此上戦士ト共ニ死ヲ求ムルタメ最後ノ攻撃ヲ行ハンカ多数兵士ノ生命ハ不必要ニ犠牲タルヘシ於是最後ノ手段トシテ皇帝ハ外国ニ赴クノ外ナク依テ左右進言者トノ一致ニ於テ無限甚痛ナル煩悶ノ後祖国ニ尽シ独国ヲ此以上ノ損害及困難ヨリ救ヒ平和及秩序ヲ回復

前独帝ノ入国ハ我ニ取リ突然ノ出来事ニシテ素ヨリ当方ノ希望シタルモノニアラス政府ハ直接若クハ間接ニ何等其入国ヲ促シタルコトナシ Heits 大將カ独帝入蘭準備ノタメ独逸ニ赴キタリトハ臆説ニスキス同帝カ我國ニ来ル以前退位シタルコト即入国當時ハ一個人タル資格ヲ有スルモノニスキサルコトハ在独蘭国公使ノ報告其他ニヨリ政府ノ承知シタル所從テ之ヲ留置 (internier) スルハ問題トナラス政府カ彼ヲ当国ニ滞在セシムルハ単ニ gastrecht (客遇權) ニ依ルモノニシテ右ハ既ニ多クノ先例モアリ独帝ニ対シ之ヲ拒ムハ当国ノ伝説ニ背クモノト謂フヘシ尤モ其滞在カ当国国内ノ治安ヲ害スルカ如キコトナキ様充分ノ措置ヲトラサルヘカラス尚前独帝ノ入国ニ対シ未タ外国ヨリ何等ノ抗議ニ接シタルコトナシ然レトモ前独帝ノ当国滞在ハ畢竟一時ノコトニスキサルヘシ外国ヨリ正式ニ其引渡ヲ要求シ来ルコト之ナキヲ保セス此場合我政府ハ法律ト条約トニ照シ慎重ノ審議ヲナササルヘカラス又前独帝永住ノ場所ヲ選定スルタメ外国ヨリ蘭国ニ協議シ来ルコトナキヲ保セス此場合政府ノ取ルヘキ措置ニ付テハ茲ニ予メ言明スヘキ限リニ非ザルモ我國ノ名誉ト威嚴ヲ損セサル方法ニ於テ解

決ヲナシ得ル限りハ我政府ニ於テ右協議ニ与カルヲ辞スルモノニ非ズ

一、第一院議員「エムデン」氏ノ独帝滞在問題ニ関スル質問ニ対スル司法外務両大臣ノ書面答弁要旨

(本年一月八日蘭紙掲載)

(1) 政府ノトリタル方針ニ付外国ニ於テハ不正確ノ報道ニ基キ誤解ヲ抱ク者アリタルハ署名者(前記両大臣自ラヲ指ス)ノ承知スル所ナリ此点ニ関シ署名者ハ客年十二月十日第二院ニ於ケル内相(内閣議長)ノ声明ヲ参照セラレンコトヲ望ム

(2) 前独帝ノ法律上ノ地位ヲ審議スルタメ委員会ノ設ケラレタルコトナシ右ノ如キ委員会ハ之ヲ設クルコト不可能ナリ尤モ司法大臣< B. C. J. Loder, Prof. A. A. H. Struycken 及 A. S. Bles ノ三氏ニ依嘱シ連名意見書ヲ徴シタリ

(3) 右意見書ハ政府ニ於テ之ヲ秘的性質ノモノト見做ス司法大臣ハ其本件ニ対スル決定ヲナスノ必要ナル場合アルヘキニ顧ミ右ノ意見ヲ求メタルモノナリ

一、本年三月十四日第一院ニ於ケル司法大臣ノ演說要

クナルカ本問題ニ対シ政府ニ於テ何等ノ声明ヲ与ヘ若クハ其方針ヲ示スヘキ言辞ハ茲ニ本大臣ノ述ブル能ハサル所ナリ

(備考)

「エムデン」氏ハ其質問演說中法律条約以外政治上ノ利害ヲモ顧慮セザルベカラザル旨ヲ述ヘタリ

一、本年五月十五日ニユーヴェ、ロツテルダム、セク

ラント論說要旨

過般來新聞紙ニ掲載セラレタル講和条件ニ依レハ前独帝ノ引渡ハ和蘭ニ要求セラルヘク且ツ之カ裁判ノタメ特別裁判所ノ出現ヲ見ルヘキカ如何ナル条件ノ下ニ何人ニヨリテ引渡ノ要求セラルルヤハ未タ明カナラサルモ外国政府ヨリ前独帝引渡ヲ要求セラルル場合吾人ハ右要求ニ応スヘキヤ否ヤ今日ヨリ之ヲ考究シ置クノ必要アリ元來庇陰權ナルモノハ其意義頗ル漠然タルモノニテ其限界亦明確ナラス講和条約締結後人道モ法律ト等シキ效果ヲ有スルノ時期到來セハ庇陰權モ其意義ヲ増加スヘシ然レトモ之將來ノ問題ニスキシテ目下ノ処前独帝ノ引渡ニシテ我法律及憲法ト抵触スルトキハ政府ハ之ヲ拒絶スルノ外ナカルヘシ尤モ若シ

前独帝ノ当国滞在問題ニ関シ「エムデン」氏ハ本大臣カ早晩重大ナル決定ヲナササルヘカラサルノ時期ナルヲ述ヘラレタルカ本大臣ハ素ヨリ右ノ場合アルヘキヲ充分ニ自覺シ居レリ故ニ茲ニハ多クヲ語ルヲ欲セス先ニ内務大臣(内閣議長)ノ演說セル所ハ(客年十二月十日ノ演說ヲサス)予メ閣議ヲ經タルモノニシテ本大臣ノ所見ト合致セルモノナリ前独帝ノ入国許可カ一部外国人ニ面白カラサル感覺ヲ与ヘタルコトニ付テハ政府モ充分熟知シ居ルト雖モ右ハ主トシテ虚偽ノ報道及之ニ対スル不当ノ判断ヨリ來ルモノナリ政府ハ唯其正当ト信スル所ヲ行フノミ「エムデン」氏ハ内務大臣ノ演說中外国ヨリ前独帝引渡ノ正式要求ニ接スルコトナキヲ保セス此場合政府ハ法律ト条約トニ照シ審議スヘキ旨ヲ述ヘタルコトヲ引用シタルカ引渡ノ要求ハ引渡条約ニ基クヘキコト言フ迄モナシ之内務大臣カ正式(formeel)ナル文字ヲ使用セル所以ニシテ該引渡要求カ法律及条約ニ照シテ考慮セラルヘキコト之亦言ヲ俟タス尚「エムデン」氏ハ法律若クハ条約ニ根拠ヲ有セス國際聯盟ニモ基礎ヲ置カサル第三ノ方法ヲ執ランコトヲ指示セラレタルモノノ如

前独帝ニシテ名目ノ何タルヲ問ハス是非法廷ニ立タサルヘカラストセハ我立法權ノ之ニ参与ヲ要スルハ(特別法律ノ制定ヲ云フモノナラン)当然ナリ而シテ右立法權ノ参与ハ便宜法ノ性質ヲ有スヘシ勿論吾人ハ便宜例外ノ法ヲ設クルコトノ危険ナルヲ認メサルモノニハ非スト雖モ飽ク迄之ヲ排斥セントスルモノニモ非ス尤モ前独帝ノ過失ニヨリ歐洲ニ大慘害ヲ惹起シタリトスル議論ニシテ正當ナラハ彼ヲ法廷ニ引出スハ我國ノ義務ト云フヘク完全ニ組織セラレタル國際聯盟ノ指導ノ下ニ前独帝ヲ引渡スハ吾人ノ異議ナキ所ナリ然レトモ右要求ヲ受諾スルニ先チ吾人ハ一定ノ条件ヲ提出セサルヘカラス即チ裁判官タルモノノ公平無私ナルヲ期スルハ最モ必要ナリ原告タル者カ被告ニ対シ裁判官タルハ人道上許スヘカラザル所トス聯合國ハ自方ノ裁判官ヨリ成レル法廷ニ於テ前独帝ヲ審判セムトスルモノノ如シ尤モ前独帝ニ弁護權ヲ保障セルカ如キモ弁護權ナルモノハ原被両造ノ利益以外ニ超然タル独立ノ裁判官ニヨルニ非サレハ其安固ヲ期シ難シ若シ右裁判ニシテ如何ナル刑罰ヲ課スヘキヤヲ決定スル性質ノモノニ非スシテ単ニ被告ノ罪過ヲ審判セムトスル性質ヲ有スルモノナリトセハ裁判官ハ単ニ独

逸ニ対シテノミナラス英仏露其他ノ諸国ニ対シテモ証拠ノ提出ヲ求ムルノ權能ヲ有セサルヘカラス要スルニ独帝引渡ノ要求提出セラレ蘭国ノ助力ヲ求メラルル場合アリトセハ單ニ法律條約ノ文面ニ照スノ外崇高ナル人道ニ顧ミ凡テノ必要ナル条件ヲ提出セサルヘカラス

之ヲ要スルニ蘭国当局者ハ前独帝ノ引渡要求ヲ受ケタル場合之ヲ拒絕スルヤ否ヤニ付テハ是迄言明ヲ避ケ居レリ尤モ條約ニヨル正式ノ引渡要求アリタルトキハ法律及條約ニ照シ之ヲ審議スヘキ旨ヲ声明セルヲ以テ右ノ声明ハ見方ニヨリテハ畢竟引渡要求ヲ拒絕スルコトアルヘキノ予言ナリトモ見做シ得サルニ非ルモ政府大臣ノ演說中留保の文句ノ存スルコト前頭ノ如シ尤モ内閣議長ハ前独帝ノ当国滞在ハ一時的ノモノナルヘキヲ言明シ其永住ノ地ヲ選定スルコトニ付他国ヨリ協議ヲ受クレハ之ニ応スルノ意ナキニ非ルヲ漏ラセリ先ニ蘭国政府筋ニテハ独帝ニ対シ任意国外ニ退去セシコトヲ希望セル旨ホノメカシ独帝之ヲ拒ミタリトノ風説アリタルモ(本年一月頃)右ハ確カナラス然ルニ昨今独帝ハ内々独国ニ帰還ノ準備中ナリトノ風説外国新聞紙ニ掲載アリタル由ナリ右ノ風説ハ其根拠ノ如何ハ別トシテ正式ノ

議會トノ關係

(一) 犯罪人引渡法令

(二) 外国人追放ニ關スル法令

(三) 若シアラハ以上諸法令ノ英仏独何レカノ翻譯

(右(丙)ニ就テハ当方ニ於テハ大略右三点ヲ主要論点ト認ムルモ貴官裁量ニ依リ本問トノ關係ノ深淺ニ応シ適宜取捨変更セラレ差支ナシ)

以上諸点ニ關シ御取調ノ上最も重要ナルモノニ付テハ当方ニ電報シ在仏大使ニ転電サレ度又詳細当方及在仏大使ニ郵報サレタシ

八二六 七月二日

在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

前独逸皇帝ノ審問ニ關シ前宰相ベートマン・
ホルウェークヨリ講和會議議長宛覺書提出ノ
件

別電 同日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一

五一五号

前独国宰相ベートマン・ホルウェークノ覺書

一四 巴里講和會議ニ於ケル戰爭責任委員會及前独国皇帝取扱關係一件 八二六

引渡要求ニヨリテ生スヘキ蘭国ノ困難ト独帝ノ苦痛トニ顧ミ幾分ノ理由ナシトセス

八二五 六月二十八日

内田外務大臣ヨリ
在仏国松井大使宛(電報)

前独帝審問ニ關スル調査方ヲ松原代理公使ニ

訓令ノ件

講第五三四号

在和蘭松原代理公使ヘ左ノ通り

第二九号

対独講和條約締結後前独逸皇帝審問ノ為聯合國側ヨリ和蘭政府ニ対シ其引渡ノ交渉ヲ為スコトナルヘキ処本件成行ノ觀測上及條約御批准準備參考資料トシテ必要ナルニ付

(甲) 本問題ニ対スル和蘭政府ノ意嚮

(乙) 蘭国一般ノ輿論及有力ナル政治家及法律家ノ意見

(丙) 本問題ニ關係アル諸法律事項

(一) 條約關係

(i) 和蘭ト独逸及聯合國トノ條約關係

(ii) 引渡実行ノ為現行條約變更ノ必要アル場合ニ於テ

講第一五一四号

(七月四日接受)

独逸前帝國宰相ベートマン・ホルウェークハ六月二十五日附講和會議々長宛書面ヲ以テ対独講和條約第二二七條前独逸皇帝聯合裁判ノ規定ニ關聯シ一ノ覺書ヲ交附シ来リ独逸帝國憲法ニ依リ彼が宰相時代ノ前独逸皇帝政治責任ハ全然彼一箇ノ責任ニ歸着シ從テ聯合國側ノ審問引渡要求ハ彼一人ニ關スルモノナル旨ヲ表明シタリ右ベートマン・ホルウェークノ覺書別電第一五一五号(仏文)ノ通り

(別電)

七月二日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一五一五号
前独国宰相ベートマン・ホルウェークノ覺書

Ko No. 1515

Aux termes de l'article 227 de Paix les Puissances alliées et associées mettent en accusation publique Sa Majesté Guillaume II de Hohenzollern, pour offense suprême contre la morale internationale et l'autorité sacrée des Traités.

En même temps, elles déclarent qu'elles adressent au Gouvernement Royal des Pays-Bas une

requête le priant de livrer l'ancien empereur entre leurs mains pour qu'il soit jugé.

En me référant à ces dispositions, je me permets de prier les Gouvernements des Puissances alliées et associées de diriger contre ma personne la procédure qu'ils se proposent d'introduire contre Sa Majesté l'Empereur. A cette fin je déclare me mettre à la disposition des Puissances alliées et associées.

Conformément aux lois constitutionnelles de l'Allemagne, c'est moi qui, en qualité de l'ancien Chancelier de l'Empire, porte la responsabilité exclusive pour les actions politiques de l'Empereur pendant la durée de mes fonctions. Je crois pouvoir en déduire le droit que les Puissances alliées et associées voulant soumettre ces actions à leur jugement, n'en demandent compte qu'à moi seul.

Convaincu que les Gouvernements des Puissances alliées et associées ne se refuseront pas à admettre qu'une norme établie par le droit public d'un Etat

mérite d'être reconnue dans les rapports internationaux, j'exprime(不明) pour qu'ils voudront bien accueillir la demande urgente que je leur soumets.

Hohenfinow, le 25 juin 1919.

Matsui.

八二七 七月二日 在仏国松井大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

前独帝審判ノ場所選定ニ関シ首相會議ニ於テ

討論ノ件

講第一五二〇号

(七月五日接受)

六月廿五日首相會議(牧野全權出席)ニ於テ前独逸皇帝ノ審判ハ聯合國中同帝ニ対スル憤怒ノ声ノ高キ場所ヲ離レタル場所ニテ行フヲ適當トスベク此点ヨリシテ英國又ハ米國ニテ裁判スルコトシテハ如何ト提議シ「ウィルソン」大統領ハ大都會ニテハ裁判セザルコトト致シ度シト述ベタルニ対シ「クレマンソー」ハ本件ハ閣僚トモ協議シタキニ付熟慮ノ期間ヲ与ヘラレタシト述ベタリ

八二八 七月十一日

在英國珍田大使ヨリ
内田外務大臣宛(電報)

英國皇帝皇后兩陛下ニ拝謁ノ模様ヲ天皇陛下

ニ執奏方西園寺牧野兩全權ヨリ依頼ノ件

第二八四号

(七月十七日接受)

宮内大臣へ

西園寺牧野兩全權ヨリ

左記執奏ヲ請フ

十日午後一時半午餐ヲ賜ハルヘキ旨當國兩陛下ヨリ御召アリ同時刻前十五分拝謁ノコトニ予テ協議ヲ了シ定刻八郎帶同兩人打揃ヒ參内皇帝陛下下拝謁ヲ賜ハリタル上是又式部長官ト打合せノ通り陛下御伝言披露ノ為之ヲ朗読シタルニ英國皇帝ニ於テモ予テ御用意ノ答辞ヲ朗読アリ右署名アルニ付帰朝ノ上我陛下ニ呈サレタシト御伝言ノ後兩人ノ參内ヲ喜ハルル優渥ナル御言葉アリ後八郎ノ随行ヲ披露シ畢ルヤ皇帝ハ長時日ニ亘ル會議列席ノ勞ヲ犒ラハレ且「コンノート」殿下御來朝ノ際ニ於ケル我歡迎ニ対シ謝意ヲ表セラレタル上休戦後直ニ聯合(脱)之ヲ独逸ニ示スコトヲ得タリシナランニハ同國モ即時承諾降服シタルヘカリシナラ

ンニ米國大統領國際聯盟講和条約挿入ヲ主張シ為ニ會議ヲ長引カシメタルハ遺憾ニ堪ヘザル次第ナリ將又世間講和条件ニ対シ批評攻撃ヲ為スモノ尠カラザルモ多数關係國ノ利害錯綜シ之カ調和ヲ計ランハ尋常事ニアラザルコトモ酌量セザルベカラズトノ御趣ヲ述ヘラレタリ

右畢ルヤ陛下ハ隣室ヨリ皇后陛下ヲ伴ハレ一同同陛下ニ拝謁シ後食堂ニ御案内ヲ受ク

食卓ニハ兩陛下及皇女殿下ノ外兩人ノミ着席シ始終極メテ打解ケラレタル態度ニテ家庭的御待遇ナリシガ食事中御談話ノ主ナルモノヲ挙クレハ左ノ如シ

陛下ハ兩人ニ対シ独逸前皇帝ノ裁判ニ関シ陛下ヨリハ何等御意見ヲ洩サレ難キモ如何ニ考フルヤヲ御下問アリ皇帝ヲ裁判ニ附スルカ如キハ帝國全權トシテ同意ヲ困難トスル所ニシテ我國ニ於テハ歴史的根柢ノ深キ思想アリ之カ同意ハ容易ニ表シ難カリシモ同盟及殘部与國トノ間ノ會議ニ於テ歩調ヲ一ニスル大局上ノ見地ヨリ已ムナカリシ次第ナリト言上シタルニ陛下ハ首肯セラレ尙蘭國政府カ果シテ引渡ヲ決行スルヤ否ヤハ問題ナリ位置ヲ換ヘテ英國若シ引渡ヲ求メラルルカ如キコトアランカ英蘭兩國国力ノ相違モアラン

一四 巴里講和會議ニ於ケル戰爭責任委員會及前独国皇帝取扱關係一件 八二九

モ英国ハ承諾セザルヘク陛下ハ断然御不同意ナリト解セラレ皇后陛下モ亦日本ニハ反対者多カラシテハ概ナキ立場ナランモ国民ハ不賛成ナラント宣ハレ皇女殿下モ和蘭ハ引渡ヲ決行シ得マシトノ御言葉アリ(不明)ノ感想ヲ懷キタリ陛下ハ次ニ米國大統領ニ関シ「ウィルソン」ハ思想家ニシテ大学教授ノ習慣トシテ講義然タル言ヲ為スコト多シ而全權ニハ講和會議中定メテ多量ノ講義ヲ聴キシコトナラント御笑アリ又支那全權調印拒絶ニ関シ遺憾ニ思シ召サル旨ヲ述ヘラレタルニ対シ右拒絶ヲ遺憾ト為スコトハ日本ノ右ニ出ヅルモノナカルヘク聞ク所ニ依レハ一旦無留保調印ノ訓電ニ接シタルモ最後ニハ反対ノ訓令アリタル由ナリ蓋シ北京山東等ニ於ケル庄迫甚シク遂ニ此事アルニ至レルナラント言上シタル処陛下ニハ支那政府ハ微弱ニシテ不斷動搖シ辭職沙汰ヲ耳ニスルコト屢ナリ民度低キ支那ニ於テ共和政府ヲ喝采スルノ所以ヲ知ラズトノ御意見ヨリ巴爾幹地方其他ニ於ケル共和国ノ増加ニ言及セラレ此種共和国ハ果シテ有終ノ美ヲ濟シ得ルヤトノ御懸念ヲ述ヘラレ尚露国ニ関シ同国モ支那ト同然民度低ク改革後大統領選挙ノ問題起リタル際「ザア」ヲ推サバ可ナラントノ説アリタル

ニ対シ注意ヲ喚起シタルニ対シ別電ノ如ク在和蘭仏国代理公使ヨリ(和蘭外務大臣ノ)回答アリタル旨七月十日附書記局ヨリ通知アリタリ

本電及別電英米伊大使並在和蘭国公使ヘ転電セリ

(別電)

七月十二日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一六〇二

号和訳文

前独帝ノ監視ニ関シ聯合國側ノ注意喚起ニ対スル和蘭国外務大臣ノ回答

講第一六〇二号和訳文

蘭国外務大臣「カルネベック」氏ハ本官ガ去ル六月二十八日同大臣ニ送附セシ公文ニ対スル其ノ回答ヲ本官ニ送附シ且左記照会ヲ同盟及聯合國ニ転達センコトヲ依頼セラレタリ

和蘭外務大臣ハ仏国代理公使ヨリ独逸前皇帝及前皇太子ノ件ニ関シ同盟及聯合國ヨリ王国政府ニ宛テタル照会ヲ受領セリ本件照会ハ(不明)風評ニノミ基クモノニシテ友邦タル中立国政府ニ対シ一ノ戒告ヲ与ヘタルモノト云フベク是レ実ニ王国政府ノ苦痛トスル所ナリ王国政府ハ素ヨリ其国

一四 巴里講和會議ニ於ケル戰爭責任委員會及前独国皇帝取扱關係一件 八三〇

一〇九六

由ナリ右ハ無識下級者ノ意見ナランカナレドモ同国ノ将来覺束ナキ次第ナリ現状ヲ以テシテハ終ニ国本確立ノ日ナカルヘク之ヲ救ハンガ為ニハ国外ヨリノ送兵助力ヲ要スルモ英国ニ於テハ社会党労働者ヨリノ反対モアリ之ヲ為スヲ得ズトノ御述懐アリタリ

右(此間脱語アラシ)

総選挙終了後職ヲ辞シ印度ヨリ東洋ニ漫遊シ本邦觀光ノ希望アル趣ハ公望曩ニ同人トノ私談中耳ニシ居タル処本日皇后陛下ヨリモ同人ニ上記(以下欠)

八二九 七月十二日 在仏国松井大使ヨリ 内田外務大臣宛(電報)

前独帝監視ニ関シ聯合國側ヨリ和蘭政府ノ注意ヲ喚起シタル件

別電 同日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛講第一六〇二

二号和訳文

右注意喚起ニ対スル和蘭国外務大臣ノ回答

講第一六〇一号 (七月十五日接受)

独逸前皇帝監視ニ関シ六月二十七日聯合國側ヨリ和蘭政府

際的ノ義務ヲ自覺スルト共ニ之ガ履行ニ関シテモ亦違算ナカラシコトヲ期スルモノナリト雖列強ノ照会ニ依リテ提起セラレタル事件ニ関シテハ王国政府ハ其享有スル權利ト其負担スル義務ニ関シ正當ナル主權ノ自由行使ヲ留保セザルベカラズ

「カルネベック」署名

八三〇 七月十二日 在仏国松井大使ヨリ 内田外務大臣宛(電報)

前独帝ノ審問ニ関シ前宰相來翰ニ対スル回答

案其他ニ付首相會議ニ於テ討議ノ件

講第一六二二号 (七月十六日接受)

六月二十八日午後講和条約調印後即刻「ヴェルサイユ」ニ於テ首相會議ヲ開キ左ノ通り決定セリ出席者「ウィルソン」「ロイド・ジョウジ」、「クレマンソー」、「ソンニノ」牧野全權

(-)前独逸皇帝ノ審問ニ関シ前宰相「ベートマン・ホルウェーク」來信ノ件

先ツ「クレマンソー」ハ往電第一五二四号ノ本件書翰ヲ朗

一〇九七

読セシメタル後審問裁判所構成ノ上ハ同書翰ヲ之ニ提出スヘキ旨回答センコトヲ提議シ各員間ニ一二問答アリ「ウィルソン」ハ審問ヲ受クヘキモノニ二種アリハ国際道徳及条約神聖ニ対スル最高犯罪トシテ審問ヲ受クヘキモノ前皇帝ハ之ニ属ス他ハ戰爭法規及慣習違反ノ行為ニ対スル裁判ヲ受クヘキモノナルガ「ベートマン・ホルウェーク」ハ其ノ何レニモ属セズト述ヘ次テ独逸憲法ノ解釈ニ関シ一二応答ノ後結局戰爭責任委員会ニ命シテ回答案ヲ起草セシメ其ノ主旨ハ聯合國ハ前宰相申出ノ精神ヲ諒トスルモ其ノ独逸憲法ノ解釈ヲ容認スルコト能ハザル旨ヲ以テスヘキコトニ決定セリ

(二)「リバウ」ニ於テ米国代表者ノ拘留セラレタル件
「ウィルソン」ハ「フーバー」ヨリノ報告トシテ米国食料分配ノ委員二名「リバウ」ニ於テ独逸人ニ拘留セラレタル旨ヲ述ヘ會議ハ休戦委員会ヲ通シ直チニ其ノ解放ヲ要求スルコトニ決定セリ

(三)聯合國首相會議記録配付ノ件

右記録ハ希望ノ向ニ配付シ得ヘキヤ否ヤノ問題議ニ上リタル処「ウィルソン」ハ首相會議ハ講和會議ノ内容ヲナスモ

別電 同日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一

七〇一号

前独逸宰相來翰ニ対スル回答案

講第一七〇〇号 (七月二十三日接受)
往電講第一五一四号「ベートマン・ホルウェーク」ノ來翰審議ノ為五大国ノ代表者(本邦側ヨリ立囑託出席)ヨリ成ル委員会ヲ構成セルガ右委員会ハ独逸前宰相ノ要求ヲ拒絶スルト同時ニ今後モ同様ノ要求ヲ為スヘキモノアルヘキヲ慮リ概括的ニ回答スルコトトシ別電講第一七〇一号回答案ヲ作製シ之ヲ最高會議ニ提出セリ

(別電)

七月二十一日在仏国松井大使宛内田外務大臣宛電報講第一七〇

一号

前独逸宰相來翰ニ対スル回答案

講第一七〇一号

Les Principales Puissances Alliées et Associées se plaisent à rendre hommage au sentiment d'abnégation dont témoigne la lettre que l'ex-chancelier de l'Empire allemand Von Bethmann Hollweg a

一四 巴里講和會議ニ於ケル戰爭責任委員会及前独国皇帝取扱關係一件 八三二

ノニ非ズ全然自分ノ發意ニ係ル予備的手段ニ過ギズ当初ハ書記官スラ出席セシメザリシ關係モアリ之ヲ配付スルトキハ或ハ反対党ニ依リ内国政策ニ悪用セラルルノ恐アリ會議ノ決議ヲ実行スヘキ適當權限アル全權委員等ニ之ヲ示スコトハ差支ナキモ其ノ他ニハ絶対ニ秘スヘシトノ意見ヲ述ヘ「ソンニノ」ハ内閣更迭ノ場合ニ之ヲ引継ガザレバ後継内閣ハ依ルヘキ材料ヲ有セザルコトナル從ツテ之ヲ公表セズ又ハ議會ニ提出セザルハ勿論ナルモ將來ノ參考トシテ当局者ニ引継グコトハ絶対ニ必要ナリト論シ「ロイド・ジョージ」、「クレマンソー」モ亦或問題ニ就キ攻撃ヲ受ケタルトキハ右筆記録ヲ引照シテ自己ノ立場ヲ説明スルノ必要アリト述ベタルモ「ウィルソン」ハ飽ク迄米國國會ノ立場ヲ異ニスル事情ヲ説キテ記録ノ配付及發表ニ反対シ結局意見ノ一致ヲ見ルニ至ラス(以下省略)

~~~~~

八三一 七月二十一日 在仏国松井大使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

前独逸宰相來翰審議ノ為委員会ニ於テ回答案  
ヲ作成ノ件

adressé au Président de la Conférence de la Paix, et dans laquelle il sollicite les Gouvernements des Puissances Alliées et Associées d'être poursuivis en vertu de l'Article 227 du Traité de Paix, au lieu et place de l'ex-Empereur allemand Guillaume II de Hohenzollern.

“Sans qu'il y ait lieu d'entrer dans l'examen du problème que peut soulever l'interprétation de la Constitution de l'Empire allemand du 16 avril 1871, en ce qui touche la nature de la responsabilité du chancelier de l'Empire telle qu'elle est prévue dans l'Article 17 de la dite constitution, les Principales Puissances Alliées et Associées doivent (?) contremaquer qu'il ne saurait être question de modifier les Articles 227 à 230 du Traité de Paix tels qu'ils ont été acceptés par la Délégation allemande qui a signé le Traité et par l'Assemblée de Weimar qui l'a ratifié.

“Ces Articles prévoient deux sortes de poursui-

tes qui ne doivent pas être confondues.

“La poursuite de l'ex-Empereur allemand ne vise que lui et, par le caractère qu'elle revêt en vertu de l'Article 227 lui-même, ne peut s'appliquer qu'à lui, toutes autres personnes accusées d'avoir commis des actes contraires aux lois et aux coutumes de la guerre devant être jugées par les tribunaux militaires dont les caractères et la compétence sont déterminés dans les Articles 228 et 229.

“Il appartiendra à l'ex-Empereur allemand, en vertu du droit de libre défense qui lui est réservé et garanti par l'Article 227, de faire valoir devant le tribunal spécial les moyens et exceptions tant de forme que de fond, de droit et de fait, susceptibles d'être invoqués en sa faveur.

“Les Principales Puissances Alliées et Associées excéderaient leurs attributions en se substituant pour la solution de ces difficultés au tribunal spécial prévu par l'Article 227, seul compétent pour en

connaitre, et duquel se relève, pour tout ce qui touche aux questions de responsabilité et de culpabilité pour l'offense suprême contre la morale internationale et l'autorité sacrée des traités, de l'ex-Empereur Guillaume de Hohenzollern”.

Matsui.

八三二 十月十九日

在仏国松井大使ヨリ  
内田外務大臣宛（電報）

独国政府ニ対シ戦時法規違反者引渡要求ニ関  
シ請訓ノ件

講第二二三〇号

（十月二十日接受）

対独条約ノ実施ニ伴ヒ聯合國政府ヨリ独逸政府ニ対シ戦時法規違反者（同条約第二百二十八条）ノ引渡シヲ要求スルコトナリ居ル処過般「ロイド」、ジョージ一、来巴ノ節最高會議ニ於テ右引渡シヲ受クベキ敵人ニ付最モ代表的ナル者ノミニ止ムルコトニ決定シタルニ鑑ミ帝國政府ニ於テ英仏等ニ比スルトキハ何等引渡シヲ要求スベキ犯人モ無之カルベキカト思考セラルルモ十月十七日条約實施委員會ニ於テ

英仏伊各政府ニ於テハ引渡シヲ受クベキ犯人ノ「リスト」モ既ニ作製済ノ由ニテ我委員ハ帝國ヨリ引渡シヲ求ムベキ犯人ノ「リスト」ニ付質問ヲ受ケタルニ依リ右ハ本國政府ニ問合セ中ナル旨答ヘ置キタル次第モアリ且ツ本件ハ數日中ニ最高會議ノ議題ニモ上ルベキニ付此ノ際帝國政府ニ於テ果シテ戦争法規違反ノ犯人ノ引渡シヲ要求セラレザル御意向ナリヤ至急御決定ノ上何分ノ儀回電アリタシ

八三三 十月二十四日 閣議案

戦時法規違反独逸人引渡要求方ニ関シ閣議請

求ノ件

対独平和条約ノ実施ニ伴ヒ該条約第二百二十八条及同附属議定書第三項ノ規定ニ基キ聯合國政府ハ独逸國政府ニ対シ戦争ノ法規慣例違反者ノ引渡ヲ要求スルコトト相成居タルカ右ニ関シ今般在仏松井大使ヨリ電報ヲ以テ先頃最高會議席上ニ於テ引渡ヲ受クヘキ敵人ハ最モ代表的ナルモノノミニ止ムルコトニ決定シタル事情ニモ鑑ミ又帝國側ト英仏側ト諸般ノ事情ヲモ比較スルトキハ帝國側ニ於テ或ハ特定人

一四 巴里講和會議ニ於ケル戦争責任委員會及前独国皇帝取扱關係一件 八三三

ヲ指定シ要求スルノ必要ナカルヘキカト思考スルモ右ニ関スル帝國側ノ意向ニ付至急最高會議ニ対シ何等説明ヲ与フルノ必要相生スヘキニ付何分ノ儀訓電アリタキ旨稟請ノ次第アリタル処帝國政府ニ於テハ同大使意見ノ通別ニ特定人ヲ指定シ其ノ引渡ヲ要求スルノ必要ナキニ付右趣旨ニテ同大使ニ回訓スルコトト致度シ

（欄外註記）

- 一、「大正八年十月二十四日大臣閣議席上ニテ通信大臣ヘ写手交、陸海両相ハ欠席ニ付別ニ主任官ヘ写送付回答ヲ求ムルコト（武者小路第二課長）」
- 二、「通信省、十月二十五日宮崎書記官ヨリ第二課長ヘ電話ニテ異存ナキ旨回答」
- 三、「陸軍省、十月二十七日町尻大尉ヨリ芝辻ヘ、大臣異存ナシ（參謀本部トモ打合済）」
- 四、「海軍省、十月二十七日古賀少佐芝辻ヘ異存ナキ旨回答」

八三四 十一月二十日

在仏国松井大使ヨリ  
内田外務大臣宛(電報)

混合軍事裁判所構成ニ関スル委員會ニ提出ノ

犯人表ニ付具報並其ノ措置方請訓ノ件

附記 敵潜水艇ニ依リ撃沈セラレタル日本船舶

講第二四〇三号

(十一月二十三日接受)

十一月十八日戰爭法規違反敵国軍人所罰、混合軍事裁判所構成ニ関スル委員會第一回開會、英、伊、日、白耳義、塞爾比、波蘭、「チエコスロウアク」代表委員出席(米國ハ犯人引渡ヲ要求セザルヲ以テ委員ヲ列席セシメズ)(一)各國提出犯人表ノ比較研究(二)混合裁判所ノ構成(三)裁判管轄適用スベキ法規等ノ問題ヲ討議スルコトナレリ

(一)犯人表ニ関シ、英、白、伊、波蘭既ニ之ヲ完了シ希臘、塞爾比、羅馬尼、「チエコスロウアク」ハ目下作製中ナルモ何レモ該表ヲ提出スルコトナレリ

本邦委員ハ最高會議ニ於テ兼テ主要模範の犯人ノミノ表ヲ作製スルコトニシ且貴電講第八二二号ノ次第モアルニ付特ニ本邦ヨリ要求スベキ人名表ヲ作製シ能ハザルコトヲ述べタル処、英、伊、白委員ハ何レモ交々本邦商船ヲ撃沈シ

タル潜航艇隊長丈ニテモ宜シキニ付譬ヘバ「某船ヲ何時何ノ地ニ於テ撃沈シタル潜航艇隊長」ト言フカ如キ形式ニテ表ヲ作り之ヲ要求スルコトセラレタシトノ意ヲ述べタルニヨリ絶対的作製不可能ナリト拒絕スルコトヲ得ザル立場ニアリ追テ確答スルコトセリ且本件ニ関シ米國ハ脱退シ居ル事情ニ顧ミ他ノ聯合諸國ハ本邦側ノ支持ヲ希望シ居ル状態ナルニ付單ニ右与國側委員ノ希望スル如キ犯人表ヲ作成シ之ハ帝國政府ガ犯人ノ引渡ヲ要求スル趣意ニアラザル旨ヲ述べテ右表ヲ提出スル位ノコトトシテハ如何右表提出期ハ條約實施期日迄ナルニ付右御含ノ上至急御回電相成度シ但シ右ハ混合裁判所構成ニ関シ本邦ヨリ裁判官ヲ歐洲ニ派遣スルヤ否ヤノ問題トハ別個ノ問題ト考量アリタシ

(二)本委員會ニ於テ各國提出ノ犯人表ヲ對照シ其ノ管轄裁判所ヲ定ムルコトナルベク聯合國中數國ヨリ起訴セラレタル犯人ハ右數國ノ混合裁判所ニテ裁判セラルコトナルベシ混合裁判所ニ出席セシムル軍事裁判官ハ各國三名宛ト決ス但シ被告ノ行為ニ応ジ裁判官ノ數ハ適宜定ムルコトナルベシ

(附記)

敵潜水艇ニ依リ  
撃沈セラレタル  
日本船舶

(通信省調)

大正七年十一月十四日現在

| 船名     | 總噸數    | 製造ノ年 | 遭難年月日    | 遭難場所                    | 船籍       | 船主        |
|--------|--------|------|----------|-------------------------|----------|-----------|
| 靖國丸    | 四、九六二  | 八九三  | 大正四、一一、三 | 地中海(アルボラン島沖)            | 大連       | 山下汽船合名會社  |
| 八阪丸    | 一〇、九三二 | 九一四  | 一一、二二    | 地中海(エヂプトブルロス燈台沖)        | 東京       | 日本郵船株式會社  |
| 建國丸    | 三、二二三  | 八九二  | 一一、二九    | 地中海(クリート島沖)             | 大連       | 南滿州汽船株式會社 |
| 大越丸    | 三、〇九一  | 八九一  | 五、二四     | 地中海(西班牙バルセロナ沖)          | 垂水       | 中越汽船株式會社  |
| 小雛丸    | 三、〇四〇  | 八八五  | 八、二      | 地中海(エヂプトアレキサンドリア沖)      | 垂水       | 村井吉兵衛     |
| 天明丸    | 三、二二四  | 八八九  | 八、一〇     | 地中海(仏國マルセイユ沖)           | 潮高江(西邊面) | 白津汽船株式會社  |
| 永田丸    | 三、五二一  | 八八九  | 一一、三〇    | 英國海峽(仏國ヴェッサン島沖)         | 朝鮮(西邊面)  | 永田三十郎     |
| 多喜丸    | 三、二〇八  | 八八三  | 一一、一六    | 英國海峽(仏國ヴェッサン島沖)         | 垂水       | 合資會社松昌洋行  |
| 青島丸    | 二、五一〇  | 九一四  | 一、四      | 葡萄牙セントヴィンセント岬南々西沖合百二十海里 | 大連       | 松昌汽船合資會社  |
| 第三喜佐方丸 | 二、五八七  | 八九二  | 一、二〇     | ビスケー灣北部(佛國グレーナン島燈台沖)    | 西宮       | 山下汽船合名會社  |
| 眞盛丸    | 二、八三七  | 八八九  | 二、二八     | 地中海(トリポリデルナー沖)          | 西宮       | 原 眞一      |
| 澤丸     | 二、五三二  | 八九〇  | 三、六      | アイルランド南西沖               | 垂水       | 大澤徳太郎     |
| 泰山丸    | 三、五二七  | 八九五  | 五、二      | アイルランドベルファスト沖           | 大連       | 橋本汽船株式會社  |
| 宮崎丸    | 七、八九一  | 九〇八  | 五、三一     | 英國海峽入口                  | 東京       | 日本郵船株式會社  |
| 神機丸    | 三、三二一  | 八九八  | 七、二      | 地中海(クリート島沖)             | 大連       | 神機汽船株式會社  |

|       |                  |                       |        |               |
|-------|------------------|-----------------------|--------|---------------|
| 信貴山丸  | 三、〇八三、八九二六、七、七   | 地中海（仏国リュウカート岬沖）       | 釜山     | 橋本 喜造         |
| 影島丸   | 四、五六六、八九八〃       | ビスケー湾北部               | 八幡岡    | 農商務省（松昌洋行貨下）  |
| 萬代丸   | 二、九二九、八九〇〃       | 地中海（チュニスボン岬沖）         | 尼崎     | 大正汽船株式會社      |
| 彦山丸   | 三、五五四、八九二〃       | 葡萄牙セントヴィンセント岬沖        | 尼崎     | 橋本 喜造         |
| 藻寄丸   | 三、七五六、九〇二〃       | カナリー島沖                | 河野     | 帝國汽船株式會社      |
| 生駒丸   | 三、〇五七、八九一〃       | マデイラ島沖                | （福井南條） | 大正汽船株式會社      |
| 常陸丸   | 六、五五七、九〇六〃       | マデイラ島沖                | 東京     | 日本郵船株式會社      |
| 東昌丸   | 三、〇三八、八九四七、      | 印度洋                   | 大連     | 田中合資會社        |
| 大天丸   | 四、五五五、八八九〃       | 地中海（サルヂニア島沖）          | 大連     | 松昌汽船合資會社      |
| 徳山丸   | 七、〇三五、九一四〃       | 地中海（シリール島沖）           | 東京     | 日本郵船株式會社      |
| 平野丸   | 七、九三五、九〇八〃       | 紐育ヲ距ル北東約二百海里沖         | 東京     | 日本郵船株式會社      |
| 小計二六隻 | 二一〇、四五三          | アイルランド南方沖             | 東京     | 日本郵船株式會社      |
| 千寿丸   | 四、三四〇、九〇〇四、一一、一五 | ポルトセッドニ向ケ仏国オラン港發後行方不明 | 大連     | 合資會社辰馬商會      |
| 報国丸   | 四、七二三、八九五〃       | 新嘉坡發後地中海通航中行方不明       | 大連     | 南滿州汽船株式會社     |
| 唐山丸   | 二、四二六、八九四六、五、七   | マンチェスターニ向ケボストン發後行方不明  | 浦賀     | （改称南滿州物産株式會社） |
| 第七雲海丸 | 二、一四三、九一六〃       | 孟買沖ニテ爆沈               | 垂水     | 合資會社松昌洋行      |
|       |                  |                       |        | （改称合資會社山本總本店） |
|       |                  |                       |        | 中村精七郎         |

|       |                 |                          |    |          |
|-------|-----------------|--------------------------|----|----------|
| 鹿兒島丸  | 四、三三二、八九一七、一、一四 | 古倫母ニ碇泊夫ヨリ孟買ニ向ケ出帆シタル後行方不明 | 尼崎 | 原田汽船株式會社 |
| 小計五隻  | 一七、九六四          |                          |    |          |
| 通計三一隻 | 一二八、四一七         |                          |    |          |

八三五 十二月八日 内田外務大臣ヨリ 在仏国松井大使宛（電報）

戦争法規違反敵国軍人ノ犯人表提出ニ関シ回

訓ノ件

講第九二六号

貴電講第二四〇三号ニ関シ犯人表ハ予メ送付シアル本省講和準備委員会ニ於テ大正七年十二月調査印刷シタル調査第

四（丙）海戦ニ関スル問題（ハ）本邦被撃沈商船及其ノ損害ニ関スル調査中第一頁靖国丸ヨリ第四頁平野丸迄ノ被撃沈船表（表中大越丸ハ「バルセロナ」、信貴丸ハ「リュウカート」ノ誤植）ニ付希望スル如キ表ヲ作製ノ上提出セラレ度シ尤モ帝國政府ハ御来示ノ通此際何等犯人引渡ヲ要求スル意思ヲ有セサル次第ニ付右ニ御含アリタシ